

古色蒼然

孤城落月(らくげつ)

見るからに古びていて趣のあるさまをいう。現在では、必ずしもいい意味で使わないうこともある。

▼「古色」は年月を経て古びたものの色つや。

例 かつては繁栄していた町だそうだが、すっかりさびれてしまい、古色蒼然としている。

類 古色古香(こしくさう)

故事来歴

事の起りから今日までの過程や歴史。物語の由来や因縁。ある結果を招いた理由、いきさつ。

▼「故事」は昔の出来事、いわれのある話のことで、「古事」とも書く。

五臟六腑

体全体、または心の中をいう。

胡馬北風

がく

ふるさとを忘れられないこと。

例 胡馬(昔の中国北方、胡の国産出の馬)は、遠く離れた地にいっても、北風が吹くところらに身を寄せるといふ。

例 年をとるにつれて胡馬北風の思いが強くなるようた。

五風十雨

五日に一度風が吹き、十日に一度雨が降るのは豊作の兆候とされ、農作に適した順調な気候をいう。また、世の中が平和で落ち着いているさま。

▼「五風」は「いふ」とも読む。

鼓舞激励

人を励まし、奮起させること。元気づけること。「士気を鼓舞する」のように二字熟

克己復礼

▼「五臟」は、漢方という「心臓・肺臓・脾臓・肝臓・腎臓」、「六腑」は「大腸・小腸・胃・胆・膀胱・三焦(消化・排泄を行う器官)」のこと。

例 夏のビールは五臟六腑にしみわたる。

自分の欲望に打ち勝ち、社会の規範にしたがって行動すること。

▼「克己」は己(おのれ)に克つ(かつ)勝つ、「復礼」は礼に復る(かえる)で、礼儀作法にしたがうという意味。

例 克己復礼を旨とする尊敬すべき人。

刻苦勉励

ひたすら努力を重ね、苦勞して勉学や仕事に励むことをいう。

▼「刻苦」は身を刻むように力を尽くし、心を勞すること。「勉励」は努め、励むこと。

例 刻苦精勵(せいいれい)、刻苦勉學(べん

語としてもよく使う。

▼「鼓舞」は、鼓を打って舞を舞うことで、転じて人の気持ちを奮い立たせることをいう。

例 叱咤(しった) 激励、叱咤督勵(とくれい)

孤立無援

たった一人で、志を共にする仲間がいないうこと。何の助けも得られないこと。また、そのさま。

例 これだけのことを孤立無援でやりとげたのは立派だ。

類 孤軍奮闘(こぐんふんとう)、四面楚歌(しめんそか)

五里霧中

深い霧に包まれて方向が分からないこと。転じて、何の手がかりもないまま行動すること、どうすればいいのか困惑する状態のことをいう。

【例】五里霧中だったこの研究も、ようやく展覧会が開けてきた。

【類】曖昧模糊（あいまいもこ）、暗中模索（あんちゅうもさく）

困苦欠乏

物資が不足し、困難な状況にあること。戦時中の生活を表現するのによく使われた。

▼「困苦」は、必要な物が乏しく、生活に苦しみむこの意。

欣求浄土

死後、西方にあるとされる極楽浄土へ行けるよう心から願うという意味の仏教語。

▼「欣求」は心から求めること。

【類】厭離穢土（おんりえど）、欣求浄土。

【例】安楽（あんらく）浄土

金剛不壊

志を固く守り、変わることがないという意味。

：。今は昨非の感に堪えない。

渾然一体

いくつかの物が一つに溶け合って区別がつかないこと。異なる物が一つに調和していること。

▼「渾」は混じるという意で、「混然」とも書く。

【例】森と湖が渾然一体となった風景。

金輪奈落

物事のきわまるところ、極限をいう。現在では、絶対はないという意味の「金輪際」を使うことが多い。

▼「金輪」は、仏教の世界観で、地下にあって大地を支える「三輪」の一つ。「奈落」は地獄の意。

【例】もう金輪際、悪事には手を染めない。

▼「金剛」は金剛石（ダイヤモンド）。「不壊」は非常に堅固で壊れないこと。

【例】金剛不壊の信念を貫いて画家として大成した。

【類】金剛堅固（けんこ）

言語道断

言葉では言い表せないほどひどいこと、とんでもないこと。悪い意味に使われるのが一般的。

▼「道断」は言う道が絶たれ、言うに言えないこと。仏教の深遠な真理は言葉ではとうい説明できないという意味の語が転じた。

【例】罪を人に着せるとは言語道断。

今是非

今日は正しく、昨日は間違っていた。つまり今になって過去の誤りを悟ること。自分のあやまちを後悔して言う語。

【例】あのとき、無謀な賭けをしていなければ

才気煥発

頭の回転が速く優れていること。鋭い才能が外に現れること。才能が光り輝くこと。他の人には見られないきらめき、ひらめきを評している。

▼「才気」は素早く適切な判断ができること。「煥」は火が赤々と輝くという意で、「煥発」は輝き現れること。

【例】才気煥発な彼女ならではのアイデア。

【類】才気横溢（おういつ）

再三再四

二度も三度もという意味の「再三」を強調した語で、何回も同じことを繰り返すこと。

【例】再三再四、お金を返してくれるよう言っているのに聞き入れてもらえないのなら、裁判に訴えるしかない。

才子佳人

才能のある男性と美しい女性。理想的な男

女の取り合わせをいう。

例 お一人のように才子佳人のご夫婦は、めったにあるものではありません。

才子多病

才能に恵まれた人は、とかく体が弱く病気がちなものだということ。男性について使う語で、女性の場合には「佳人薄命」（かじんはくめい）、「美人薄命」などという。

才色兼備

才能があるうえ、容姿も美しいこと。女性についていうのが一般的。

例 才色兼備の誉れ高い女性。

探長補短

他人の長所を探り入れ、自分の短所を補うこと。また、他でやっていることを見習い、自分がやっていることの悪い点を補うようにすること。

例 私のように未熟な者でも、探長補短を心

くに目下の優れた人物を手厚く迎えることをいう。

▼「顧」は訪ねるという意味。

例 中国の三国時代、蜀の国の劉備が諸葛孔明を参謀として、招こうとしたときの話。劉備は孔明の協力を得るため、自ら孔明の草庵を訪れたが、一度目も二度目も不在で会えなかった。しかし、諦めることなく三度目に訪れると、孔明は劉備の熱意に感動し、蜀の天下制覇のために働いたという。

三者鼎立

実力が同じ程度の三人が対立していること。三つ巴。

▼「鼎」は「かなえ」と訓読し、煮炊きや祭祀に使う三本の足が付いた道具のこと。

例 候補者が三者鼎立している激戦の選挙区。

斬新奇抜

凡人ではとうてい思い浮かばないような新

がけてこまでやってこれました。

例 取長（しゅちやう） 補短、助長（じゅちやう） 補短

三寒四溫

冬、寒い日が三日続き、その後、四日ほど暖かい日が続く。これが繰り返される気象現象をいう。また、そのように寒い日と暖かい日を繰り返しながら、次第に春になっていくこと。

山高水長

長く伝わる立派な人物の功績や名誉を、山がいつまでも高くそびえ立ち、川の水が絶えることなく流れ続けることにたとえた語。

例 女子教育に果たした津田梅子の業績には山高水長の価値がある。

三顧之礼

礼儀を尽くして優れた人材を招くこと。と

しいこと。

▼「斬新」は、きわだって新しいこと。「奇抜」は、人並みではない風変わりなこと。

例 斬新奇抜な発想。奇想天外（きそうてんがい）

三寸之轄

小さくて絶対に必要な大切なもの。些細であつても欠かせないもの。

▼「轄」は、車輪が軸から抜けないようにするくさびのこと、これが三寸（約九センチ）であることからきている。

例 彼の働きは地味だが、会社にとって三寸之轄ともいふべき役割を果たしてくれている。

三百代言

詭弁を弄して相手を言いくるめること。また、そのような人。

▼「三百」は三百文（もん）の略で、価値

が低いことのとえ。「代言」は代言人の略で、昔は弁護士のことをこう呼んだ。

例 不祥事が起こるたびに、三百代言を並べ立てるのにはあきれる。

三面六臂

一人で数人分の動きをすること。また、一人の人が多方面で活躍すること。

例 「臂」は手首からひじまでの部分を指し、三つの顔と六本の腕を持った仏像からきている。

例 本業以外でも彼は趣味の写真や文章が高く評価されていて、三面六臂の活躍ぶりだ。

類 八面（はちめん） 六臂

三令五申

三回命令し、五回言い聞かせるという意から、何度も繰り返し命じたり、言い聞かせたりすることを使う。

例 社員全員に趣旨を徹底させるため、各所属長は職場で三令五申するように。

例 「反哺」は食べ物を口移しにして食べさせることの意。

例 故郷に帰って家業を継ぎ、慈鳥反哺を尽くすつもりだ。

類 烏鳥私情（うちようのしじょう）、三枝之礼（さんしのれい）、反哺之孝（のこう）

四海兄弟

世界中の人々は皆、兄弟のように仲良くし、何の分け隔てもなく親しく接するべきだということ。

例 「四海」は四方の海、転じて世界を指す。

例 「けいてい」は漢音読み。

類 四海一家（いっか）、四海同胞（どうほう）

自画自賛

自分の行い、作品、考えを自分でほめること。

例 「賛」は、絵に合わせて書き込む詩文。自ら描き、自ら賛することから、自分に関す

類 周知徹底（しゅうちてつてい）

尸位素餐

高い地位にありながら、その職務や責任を果たさず給料を受け取っていること。また、才能や功績がないのに高い地位についていること。ひらたく言えばくつぶし。

例 「尸位」はじつとしていて動かないこと、「素餐」は仕事をせずに食べることの意。

例 恩人に頼まれて雇ったが、尸位素餐を決め込まれたのでは辞めてもらうほかない。

類 窃位（せつゐ） 素餐、伴食宰相（ばんしよくざいしやう）

慈鳥反哺

子供が年老いた父母に孝行し、親の恩に報いること。鳥は、大きくなると親鳥に口移して餌を与えることからきている。

例 自分を自分でほめる意になった。「自費」は「自讃」とも書く。

例 自画自賛と笑われるかも知れないが、このプランにはそれだけの自信がある。

類 我田引水（がでんいんすい）、手前味噌（てまえみそ）

自家撞着

発言や行動に関して、その前後のつじつまが合わず、矛盾していること。

例 「自家」は自分の家、転じて自分のこと。「撞着」は突き当たること、矛盾すること。

例 ふだんは横文字の氾濫を嘆いているくせに、横文字だらけの文章を書くとは何と自家撞着な人だ。

自家薬籠

自分の薬箱の中の薬のように、いつでも取り出して役立てられるもの。また、自分の意のままに動かせるよう手なずけた人物を

時期尚早

例 ライバル会社の社員を自家薬籠のものにして情報を聞き出す。

まだ機が熟しておらず、事を起こすには早すぎる。

例 画期的な新商品だが、時期尚早だと思われるので、発売日は延期したい。

自給自足

自ら給し、自ら足りる。つまり、自分が必要とするものは自分でつくるということ。

例 米も野菜もつくっているし、魚は近くの海で釣ってくる。食べることに関しては自給自足である。

四苦八苦

ひどく悩み、苦勞すること。仏教語で、あらゆる苦しみの総称。

▼「四苦」は生・老・病・死。「八苦」は、

いう意味で使われる。

例 さんざん人をだましてきた男が詐欺にあうとは自業自得だな。

例 悪因悪果（あくいんあつか）、因果応報（いんがおうほう）、自作自受（じさくじじゆ）、自縄自縛（じじょうじばく）

時時刻刻

時間を追うごとに。時とともに。物事が次々と連続して起こること。

例 「一刻」は「こっこく」とも読む。時時刻刻と変化する経済情勢。

子子孫孫

子孫の続く限り。

例 雅楽の家に生まれたからには、私もこの伝統芸能を子子孫孫に伝えていく使命がある。

事実無根

事実に基づいていない根も葉もない話。

この四苦に愛別離苦（愛する者と別れる苦しみ）、怨憎会苦（憎んでいる者とも会わなければならない苦しみ）、求不得苦（求めて得られない苦しみ）、五蘊盛苦（心身から発する苦しみ）を加えたもの。

例 サラリーマンを辞めて親の家業を継いだ当初は四苦八苦したが、努力の結果、ようやく商売のコツが分かってきた。

例 七難（しちなん） 八苦

試行錯誤

いろいろな方法を試し、失敗を繰り返しながら困難な問題の解決法を探っていくこと。

例 試行錯誤を重ねて、ようやく完成した。暗中模索（あんちゅうもさく）

自業自得

自分がしたことの報いは必ず自分が受けるということ。善悪いずれの結果についてもいう語。現在では、悪事の報いを受けると

▼「無根」は根拠がないという意味。

例 私が不倫しているなどというのは事実無根の噂だ。

獅子奮迅

獅子が奮い立って激しく突進することから、勢いよく物事に対処するさまや、激しい意気込みをいう。

例 この危機を乗り越えるため、みんなに獅子奮迅の働きを期待する。

例 猪突猛進（ちよとつもうしん）

自縄自縛

自分の行動や発言がわざわざして身動きがとれなくなり、苦しむこと。自分の縄で自分を縛ることからきている。

例 日頃のえらそうな物言いが自縄自縛を招いてしまった。

例 悪因悪果（あくいんあつか）、自業自得（じごうじとく）、自業自縛

死屍累累

正視できないほど多くの死体が折り重なっているさま。戦いの後の悲惨きわまりない状態。

▼「累累」は、重なり合っていること、あたり一面にころがっていることの意味。

例 この業界は激しい安売り競争の結果、倒産する会社が相次いで死屍累々のありさまだ。

自然淘汰

自然界では周囲の環境に適合した生物が生き残り、適合できなかった生物は子孫を残せずに減っていくということ。また、そのようによいものが残り、悪いものが消えていくということ。

例 プームに乗ってたくさんさんの類似商品が出回っているが、いずれ自然淘汰される。

類 適者生存（てきしゃせいぞん）

▼「舌先」は言葉、弁舌。「三寸」は約九センチで、短いことのとえ。

例 舌先三寸で世の中を渡ってきたような男の言うことは信用できない。

七転八起

七転び八起き。何度失敗しても屈することなく、その都度立ち上がり、物事に挑むこと。

▼「七」と「八」は数が多いことを表す。

例 今度の失敗は相当な痛手だったが、七転八起の精神を持った彼なら必ず立ち直るだろう。

類 捲土重来（けんどちようらい）、不撓不屈（ふとうふく）

七転八倒

激しい痛みで襲われ、のたうち回って苦しみ、悶えること。また、混乱状態を表すときに使う。「しちてんはつとう」、「しちてんはちとう」、「しちてんはつとう」とも読

志操堅固

周囲の状況や思惑に左右されることなく、自分の志や考えを守りつづけて変えないこと。

▼「志操」は、心のもちかた、志。

例 志操堅固な相手と妥協点を見いだすのは難しい。

類 堅忍不拔（けんいにんふたつ）、秋霜烈日（しゅうそうれつじつ）

時代錯誤

時代の流れに合わない考えや行動。また、いつまでも昔ふうのものにこだわること。

▼「錯誤」は、事実とそれに対する観念、認識がずれていることの意味。

例 時代錯誤な法律は改めるべきだ。

舌先三寸

言うことは達者で巧みだが、心がこもっていないこと。

例 思いもよらない事態に遭遇して七転八倒した。

七難八苦

さまざまな苦しみや、ありとあらゆる災難。

▼「七難」は、仏教でいうこの世で受ける七種の災難のこと（流行病、外国の侵略、内乱、風水害、火災、霜害、日月食）。「八苦」は「四苦八苦」を参照。「色の白いは七難かくす」のように二字熟語としても使われるが、この場合の「七難」は、さまざまな欠点を指し、色白の女性の欠点は気にならないという意味。

例 七難八苦を覚悟して難工事をやりとげろ。

類 艱難辛苦（かんなんしんく）、四苦（しく）八苦

七歩之才

詩や文章の才能が優れていること。

死中求活

【例】三国時代、魏の王、曹操に二人の息子がいた。その死後、後を継いだ兄は弟の詩文の才を憎んで迫害していたが、あるとき、七歩歩く間に詩を一首つくらなければ重い処罰を課すと弟に言った。これに対し、弟はその場で兄をいさめる素晴らしい詩をつくったという。

追いつめられた状況にあつて、助かる道を必死に模索すること。また、捨て身の覚悟で事に当たること。「死中に活を求める」とも読み、現在はこのほうが一般的。

四通八達

道路が四方八方に広がっていること。転じて、往來の激しいにぎやかな所、交通網の発達している所、情報がよく伝わることをいう。

【例】インターネットによって情報が四通八達している。

動すること。口先だけでなく実際の態度や行動で表すことが大事だということ。

▼「躬」は自分でという意味。

【例】どんなに立派なことを言っている、実践躬行が伴わなくては人はついてこない。

【類】率先（そつせん）躬行、率先垂範（すいはん）、率先励行（れいこう）

叱咤激励

激しく強い言葉で、あるいは大声で叱ったり、励ましたりして力づけ、奮起させること。

【例】今日の相手にはとても勝てないと弱気だった選手たちが、監督の叱咤激励で奮い立った。

【類】啓発（けいはつ）激励、鼓舞（こぶ）激励、叱咤督励（とくれい）

疾風迅雷

行動が素早く激しいこと。また、そのような勢いでやりとげること。事態が急変する

实事求是

【類】四通五達（ごたつ）

事実に基づいて、物事の真相や真理を探求すること。また、先入観を持たず、風説にも惑わされることなく、真実を求めようとする姿勢をいう。

【例】裁判官に求められるのは实事求是の姿勢である。

質実剛健

飾り気がなく真面目で、心身ともに健康でたくましい様子。

▼「質実」は飾り気のない様子、「剛健」は強くすこやかであるという意味。

【例】彼は学生の頃から悪い遊びに手を出すこともなかった質実剛健の若者だ。

【類】剛毅木訥（こうきぼくどつ）

実践躬行

理論や観念にとどまらず、自ら率先して行

という意味もある。

▼「疾風」は速くて激しい風、「迅雷」は激しい雷鳴。

【例】チャンスと見たら疾風迅雷の勢いで攻撃せよ。

【類】疾風怒濤（どとう）、迅速果敢（じんそくかかん）、電光石火（でんこうせっか）

疾風怒濤

激しい風と逆巻く波。転じて、時代や状況の変化が激しい勢いで押し寄せること。動きが非常に素早いこと。

【例】疾風怒濤の時代を乗り切った経営手腕。狂瀾（きやうらん）怒濤、疾風迅雷（じんらい）

櫛風沐雨

風雨にさらされて奔走すること。苦難の道をたどること。

▼「櫛風」は風を櫛の代わりにして髪をとくこと。「沐雨」は雨で体を洗うこと。

例 櫛風沐雨の人生。

類 櫛風浴雨（よくう）、風櫛雨沐（ふうしつ）もく

紫電一閃

一瞬の変化や、物事の急激な変化をいう。

▼「紫電」は、鋭い刀を振るったときにひらめく紫の稲妻、「一閃」は、さっとひらめくことの意味。

例 これほどに事態が急変するとは。まさに紫電一閃というべきだな。

類 光芒（こうぼう）一閃、電光石火（でんこうせっか）

四分五裂

バラバラに分裂すること。統一されていた秩序が乱れること。また、そのような状態をいう。

▼「四分」は「しぶ」とも読む。

例 卓越したリーダーを失い、四分五裂に陥った。

当て推量。物事を勝手に想像して推し量ること。

▼「揣摩」は、あれこれと推測すること、「すいま」とも読む。「臆測」は、いかげんな推測のことで、「憶測」とも書く。

例 離婚の理由について周囲がいろいろ言っているが、しよせんは揣摩臆測に過ぎない。

四面楚歌

四方を敵に囲まれて助けもないこと。自分に同調してくれる人が誰もおらず、反対する人ばかりで心細いこと。

故 楚の国の項羽は漢軍と戦っていたが、部下が次々と漢軍に寝返り、形勢が悪化していった。ある日、包囲している漢軍から楚の民謡を歌う声が聞こえ、項羽は敗北を悟ったという。

例 自分の考えは正しいと信じているが、四面楚歌の身ではどうしようもない。

類 孤軍奮闘（こくんふんとう）、孤立無援（こりつむえん）

類 四散（しさん）五裂、四分五割（ごかつ）

自暴自棄

失望のあまり理性をなくし、やけくそになること。自分の思いどおりにならず、投げやりになること。

▼「自暴」は、自分で自分の身をそこなうこと。「自棄」は、自分の身を捨てること。

例 恋い焦がれていた女性に振られて自暴自棄になってしまった。

四方八方

あらゆる方向のこと。

▼「四方」は東西南北。これに北東、北西、南東、南西を加えた方が「八方」。

例 貴重な古書が欲しくてたまらず、四方八方手を尽くして探す。

類 四方八面（はちめん）、四面（しめん）八方

揣摩臆測

自問自答

自分自身に問いかけ、その問いに自分で答えること。心の声に耳を傾けること。

例 これからやろうとしていることに誤りはないのか、何度も自問自答してみた。

杓子定規

すべてのことに一つの基準や感覚を当てはめて判断しようとして、融通が利かないこと。また、そうした態度をいう。

例 そんな杓子定規な考えでは、変化の激しい時代に対応できないよ。

類 四方四面（しかくしめん）

弱肉強食

弱い者の肉は強い者の食料になるということから、強者が弱者を倒し、弱者の犠牲の上に強者が栄えることをいう。「強食弱肉」ともいう。

社交辞令

例 新規参入の会社が相次ぎ、この業界は弱肉強食の様相を呈しはじめた。
類 適者生存（てきしゃせいぞん）、優勝劣敗（ゆうしょうりつぱい）

人とうまく付き合っていくためのお世辞。リップサービス。

▼「辞令」は習慣的で形式的な言い回しのこと。

例 あれだけほめられると、社交辞令と分かっているのも悪い気はしないものだ。

類 外交（がいこう）辞令

奢侈淫佚

身分不相応な贅沢をし、不道徳で節度のない行いをすること。

▼「奢」は行き過ぎたさま、「侈」は多いことを表し、「奢侈」は物量が多大であること、転じて行き過ぎた贅沢を意味する。「淫」はひたる、おぼれる。「佚」は楽しむ、親友」という場合は、かけがえのないという意味になる。

例 風雨をものともせず、遮二無二突き進む。
類 我武者羅（がむしゃら）

縦横無尽

何事にもとられず、思う存分に行動するさま。勝手気ままに振舞う様子。

▼「縦横」は縦と横、東西南北。そこからあらゆる方向、転じて自由自在、気ままの意。「無尽」は尽きることがないという意。

例 縦横無尽に不正をあばく。
類 縦横自在（じゅうざい）、縦横無碍（むげ）、自由（じゆう）自在

秀外惠中

顔がきれいで頭もよいこと。

▼「秀外」は外見に秀でていること、「惠中」は頭脳が優れていることの意。

例 おたくのお嬢さんは秀外惠中で、うらやましい。

洒洒落落

なまけるの意で、「淫佚」は、とくに洒色におぼれることを指す。

性格や態度、言動がさっぱりしていて、物事に執着しない様子。また、そのような人。心に何のわだかまりもなく、さっぱりしているという意味の「洒落（しゃらく）」を重ねて強調した語。

▼「洒落」には「しゃれ」という読み方があるが、その場合は、類言に引かれた言語遊戯、または着ている物や持ち物の趣味がいいという意味になる。

遮二無二

後先のことを考えず、ただがむしゃらに物事に取り組むこと。無鉄砲。周囲の状況に目を配らず強引に事を進めること。

▼「遮二」は二をささざるで、一つのこと、熱中することの意。「無二」は二がないで、先を考慮せずに進むこと。の意。「無二の才色兼備（さいしよくけんび）」

自由闊達

心が広く、おろからで気取りがないこと。

▼「闊達」は度量が大きく、些細なことにこだわらないこと。の意。

例 社長が自由闊達な人なので、伸び伸びと仕事でさる会社である。

類 闊達自在（くわだざい）、天空海闊（てんくうかいくわ）

衆議一決

大勢で議論、または相談して意見が一致し、結論が出ること。

例 意見が分かれていたが、今日の会議で衆議一決、進むべき方向が定まった。

羞月閉花

あまりの美しさに月は恥じらい隠れ、花は閉じてしまう。このことから、容姿の美しい女性の形容。「羞花閉月（しゅうかへいぎつ）」

げつ」ともいう。

【例】映画祭に出席した女優たちの美しさは、まさしく薔月閉花というべき。

【類】沈魚落雁（ちんぎょらくがん）

終始一貫

どんなに状況が変わろうと、最初から最後まで考えや態度を変えないこと。

▼「一貫」は貫き通すという意味。

【例】恩師は、不良だった私に温かい愛情を終始一貫注いでくれた。

【類】首尾（しゅび） 一貫、徹頭徹尾（てつとうてつび）

自由自在

自分の思いのままにできること。思う存分に振舞う様子。

▼「自在」は、束縛するものも邪魔するものもなく、心のままにできるという意味。

【例】リボンを自由自在に操る新体操の華麗な演技。

修身齊家

行いを正し、円満な家庭を築いてこそ仕事に打ち込めるということ。

▼「修身」は我が身を修めるで、心がけや行いを正しくする意。「齊家」は家庭を整え治めるという意。

【例】彼が立派な成績を上げているのは修身齊家のたまものだ。

秋霜烈日

刑罰、権威、意志などがきわめて厳格であること。

▼「秋霜」は秋の冷たい霜、「烈日」は真夏に照りつける太陽。どちらも激しく厳しいものを意味する。

【例】あれだけの不祥事を起こしたのだから、秋霜烈日の懲罰を課されても当然だ。

【類】志操堅固（しそうけんこ）

十人十色

周章狼狽

【類】縦横（じゅうおう） 自在、縦横無尽（むじん）

思いがけない事態に直面し、慌てふためき、うろたえるさま。

▼「周章」も「狼狽」も、慌ててうろたえるという意味。

【例】大地震が起ったときに周章狼狽しないために日頃からの備えが必要だ。

【類】右往左往（うおうさおう）

衆人環視

周囲を大勢の人々が取り巻いて見ていること。

▼「環視」は、ぐるりと取り囲んで見るという意味で、「監視」と書くのは誤り。

【例】衆人環視の中で起こった衝撃的な殺人事件。

【類】衆目（しゅうもく） 環視

十人いれば十通りの考えや好みがあり、人それぞれに違うということ。

【例】今年の新人社員は十人十色。個性的な人材が集まった。

【類】各人各様（かくじんかくよう）、三者三様（さんしやさんよう）、多種多様（たしゆたよう）、千差万別（せんさばんべつ）

秋風素寞

夏の盛りが過ぎて秋風が吹くようになり、ものさびしい光景に変わること。転じて、盛んだったものの勢いが衰え、落ちぶれてわびしげなさまの意にも使われる。

▼「莫」は「寞」とも書く。

【類】秋風寂莫（せきばく）、秋風落莫（らくばく）

自由奔放

慣習などにとらわれず、気がねをすることもなく、自分が思ったとおりに行動すること。

ることをいう。

【類】 眼光紙背（がんこうしはい）

取捨選択

一定の基準にしたがって、必要なものを残し、不必要なものを捨てる判断すること。

【類】 膨大な情報を取捨選択して整理させた。

取捨分別（ふんべつ）

衆生済度

仏や菩薩が、迷い苦しんでいるものすべてを悟りへと導くという仏教語。

【類】 「衆生」は、迷いの世界に生きる生き物すべてを指し、「済度」は迷い苦しむものを悟らせること。

朱唇皓齒

美しい女性を形容する語。

【類】 「朱唇」は紅をさした女性の唇、「皓齒」は白くて美しい歯の意。

【例】 朱唇皓齒の美しさに心がときめいた。

ついでに。

出処進退

現在の地位や役職にとどまるか、辞めて退くか。要するに身の処し方。「進退出処」ともいう。

【類】 「出所」と書くのは誤り。

【例】 私もそろそろ出処進退を考えるべき時期になった。

出藍之誉

教えを受けた弟子が師より優れた人物になること。また、子が親より優れていること。

【類】 「青は藍（あい）より出でて藍よりも青し」（藍という草の葉から取った青い染料は、藍の葉より美しい色をしている）からきた語。

【類】 出藍之青（せい）

酒囊飯袋

何の役にも立たない人、無駄に時を過ごす

【例】 ときにはまわりが振り回されることもあるが、彼の自由奔放なところが好きだ。

自在（じざい） 奔放、奔放不羈（ふさ）

主客転倒

主人と客人の立場がひっくり返ること。転じて、物事の位置づけや順序が逆転すること。また、重要なものとそうでないものの扱いを取り違えることをいう。

【類】 「主客」は「しゆきやく」とも読む。

【例】 主客転倒な会社に見えるでしょうが、社員が社長にスズケ物を言えるから、うちは伸びているんですよ。

【類】 本末（ほんまつ） 転倒

熟読玩味

文章をていねいに読み、その内容や意味を深く味わうこと。

【類】 「熟読」は繰り返して、じっくり読むこと。

「玩味」は、食べ物をよく味わうという意味で、そこから物事の意味や道理を理解す

首鼠両端

いつまでも迷って決めかねること。周囲の状況を探ってばかりいて、行動に移さないこと。曖昧な態度のたとえ。日和見。

【類】 「首鼠」は、疑い深い鼠が穴から首を出したり、引込めたりして様子をうかがうこと。「両端」には、ふた心の意がある。

【例】 首鼠両端している人物にはイライラさせられる。

【類】 右顧左眄（うこさへん）、狐疑逡巡（こぎゆんじゆん）

酒池肉林

贅沢で盛大な酒宴。いかかわしい宴会。悪い意味で使うことが多い。

【類】 殷の紂王（ちゆうおう）が池に酒を満たし、木に干し肉をかけて林のようにし、その間を裸の男女に走り回らせて酒宴を開いたといふ。

【例】 大勢の美女をはべらせ、酒池肉林にひた

人を軽蔑するという語。

▼「酒囊」は酒を入れる革袋、「飯袋」は、ご飯を入れるおひつのこと。転じて、大酒を飲み、飯をたらふく食べるだけの無能な人物をいう。

例 有能な男だと思つて採用したのに酒囊飯袋だったとは、もっと人を見る目を養わなくては。

類 無益な大食（むげいたいしよく）

首尾一貫

言動や態度、方針が最初から最後まで同じで、矛盾がないこと。筋が通っていること。

▼「首尾」は頭と尾。転じて、物事の始まりから終わりまでを意味する。「一貫」は一つの方法を貫き通すこと。

例 交渉に首尾一貫した方針で臨む。

類 終始（しゅうし）一貫、徹頭徹尾（てつとつてび）

純一無雜

純真無垢

清らかな心を持っていること、性格が素直で飾り気がないことの意。子供についていうことが多い。

▼「純真」は嘘を言ったり人を疑ったりする気持ちがないこと。「無垢」は汚れのない状態。

例 純真無垢な子供に接するたびに反省させられる。

類 純一無雜（じゆんいつむざつ）、純粋（じゆんすい）無垢、清浄（せいじよう）無垢

春風駘蕩

春の風がのどかに吹くさま。そこから、何事もなく平穏なこと、態度がのんびりしていて、温和な人柄をいう。

▼「駘蕩」は、伸び伸びとしておだやかなさま。

例 奥様は春風駘蕩としたお方ですね。さぞ

不純なものが全く混じっていないこと。また、嘘をつかず、邪念のない人物を形容している。

例 彼のように一途で純一無雜な青年に会うと心が洗われる。

類 純真無垢（じゆんしんむく）、清浄（せいじよう）無垢

春日遅遅

春の日が遅い。つまり、暮れゆくのが遅い、のどかでうらかな春の一日のこと。

例 春日遅遅の休日家族とともにのんびりと過す。

類 春風駘蕩（しゅんぷうたいとう）

純情可憐

相手を信じて疑うことがなく、頼りなさそうで、なんとかして守ってあげたいという気持ちにさせるさま。

例 彼女のように純情可憐だと、いつ悪い男に騙されるかはなんとなくに心配だ。

かし、ご家庭は円満でしよう。

類 春日遅遅（しゅんじちぢちち）

順風満帆

障害が何一つなく、物事が順調に進むこと。すべてがうまくいくこと。

▼「順風」は追い風のこと、帆船が追い風を受けて帆をいっぱいにくらませ、快調に航海することからきている。

例 良家に生まれ、一流大学を卒業、出世もとんとん拍子。まさに順風満帆の人生ですね。

上意下達

上の者の意思や命令を下の人に伝えること。また、上の意思を下に徹底させること。

▼「下達」を「けたつ」と読むのは誤り。

例 今度の失敗は社長の考えが現場の末端にまで浸透していなかったからだ。上意下達の仕組みを作らなくてはならない。

類 上命（じょうめい）下達

笑止千万

あまりにも馬鹿馬鹿しくて話にならないこと。非常に滑稽なこと。

▼「千万」は、語の下に添えて、はなはだしい、この上ないという意味を表す。

例 営業一筋三十年の私に売り上げをしのいでみせると言うとは笑止千万だ。

盛者必衰

今、どれほどの栄華を誇っている者であっても、やがては必ず衰えるときがくるということ。この世のはかなさをいう仏教の人生観。

例 盛者必衰は世の習い。成功におごり高ぶってはいけな。

類 榮枯盛衰（えいこせいすい）、生者必滅（しょうじやひつめつ）、盛者必滅

常住不断

常に絶え間なく続いていること。途切れるこ

例 この愛は生生世世、変わらない。

精進潔斎

神仏をまつる前に、酒や肉を断つて行いを慎み、心身を清めること。

▼「精進」は、一心に仏道修行に励み、心身を清く保つこと。美食・肉食を避け、粗食・菜食をするという意味もある。「潔斎」は酒や肉を断ち、行いを慎み、心身を清めること。

例 このような不始末をしでかしたからには、精進潔斎して反省の日々を送りたい。

類 齋戒沐浴（さいかいもくよく）

真正正銘

全く嘘いつわりがないこと。間違いなく本物であること。

▼「正銘」は由緒正しい銘があるということから本物、真実を指し、「真正」と同じ意味。

例 鑑定した結果、真正正銘、鎌倉時代の仏

とがないさま。

▼「常住」は、過去・現在・未来にわたって変化がなく存在するという。

例 大学を卒業してからも、常住不断の勉学に励んでほしい。

類 行住坐臥（ぎょうじゅうざが）、常住坐臥、日常（にちじょう）坐臥

情状酌量

さまざまな事情を考慮して、刑罰を軽減すること。

▼「酌量」は、米や酒を量ること、これが転じて、処分を決定する際に事情をくみとるという意味になった。

例 あまりにも悲惨な境遇を思えば、情状酌量の余地がある。

生生世世

生まれ変わって、死に変わって経験する世。つまり、永遠のことをいう。

例 像であることが分かった。

小心翼翼

気が小さくてビクビクしているさま。本来、細かく気を配り、慎み深いという意味だが、現在はこのような使い方をすることは少ない。

▼「翼翼」は慎み深いという意味。

例 気が弱いとは思っていたが、これほど小心翼翼とした人物だとは。

類 細心（さいしん）翼翼

掌中之珠

最愛の妻や子供。また、自分が最も大切にしているもの。

▼「珠」は宝玉のことで、手のひらの中に入れた宝物という意味からきている。

例 娘は私にとって掌中之珠です。

情緒纏綿

感情がまつわりついて離れないこと。

嘯風弄月

▼「情緒」は怒り、悲しみ、喜びなどの感情や雰囲気の意味し、正しくは「じょうしよ」と読むが、現在は慣用音として認められている「じょうちよ」が一般的。「纏綿」は、愛情が深く細やかで離れにくい様子、まといつくことの意。

例 情緒纏綿たる文章。

自然の風景に親しみ、その趣を味わうこと。

▼風に嘯（うそぶ）き、月を弄（もてあそぶ）と訓読する。「うそぶく」は詩歌を口ずさむという意味。「もてあそぶ」は自分の心を慰めるものとして愛する、観賞するという意味。

例 吟風（きんぷう）弄月、嘯風（ちようふう）弄月

枝葉末節

物事の本質から外れた些細な部分、重要ではない物事のたとえ。枝の葉っぱも末のは

諸説紛紛

一つの問題について、いろいろな学説や意見に分かれてしまい、收拾がつかないこと。また、いろいろな噂が飛び交い、真実がつかめないこと。

▼「紛紛」は糸が乱れて、もつれる様子のこと。

例 この問題については諸説紛紛としていて、結論が出るまでには相当な時間がかかりそう。

例 議論百出（ぎろんひやくしゅつ）、甲論乙駁（こうろんおつぱく）

白河夜船

ぐつすり寝込んでいたため何が起ったのか全く知らないこと。また、知ったかぶりをする。

例 昔、京都を見物してきたと嘘を言ったところ、名所の白河について質問された。てっきり川のこただと思ひ、夜中に船で通ったの

うにある節も、樹木の中心である幹から外れていることからきている。

例 枝葉末節にこだわるあまり、本当に大事なことを見逃している。

枝葉末端（まつたん）

諸行無常

この世のもののすべては常に変化し、消滅していく。永久不変なものはないという意味の仏教語。

▼「諸」は宇宙のありとあらゆるものの、「行」は変転流動するという意味。「無常」は、生ある者は必ず滅びるという意味で、「無情」と書くのは誤り。

例 有為転変（ういてんべん）、有為無常

初志貫徹

最初に抱いた志や信念を変えないことなく、最後までくじけずに貫き通すこと。

例 君の志は壮だ。困難にぶつかっても多いだろうが、ぜひ初志貫徹してほしい。

で分らないと答えたという話に基づいている。

例 彼の言うことはどうもあやしい。白河夜船じゃないのか。

私利私欲

自分だけの利益や欲求だけを追い求めること。公益よりも個人的な損得を優先させること。

例 私利私欲が目がくらむ。

支離滅裂

言うことに統一性がなく、めちゃくちゃなこと。また、文章や色、形などにまとまりがなく、訳が分からないこと。

▼「支離」は分かれて散る、「滅裂」は破れて裂け、形がなくなるという意味。

例 こんな支離滅裂な文章では、とうてい理解できない。
四分五裂（しぶんこれつ）

思慮分別

物事を深く考えたうえで適切な判断を下すこと。また、それができる能力、知恵のこと。

▼「分別」は社会人として求められる理性的な判断のこと。

例 もう三十代になったのだから、思慮分別を持ちなさい。

類 熟慮断行（じゆくりよだんこう）

四六時中

一日中。いつも。常に。

▼「四六時」とは、四×六で二十四時間の意。

例 昨日出会った素敵な人のことが四六時中、頭から離れない。

神韻縹渺

芸術作品が優れていて、奥深い味わいがあることのとえ。

類 氣分一新（きぶんいつしん）

神機妙算

神様が行うような絶妙のはかりごと。とうてい常人には思いつかない優れたはかりごと。

例 神機妙算の作戦にやられた。敵ながらあった。

深山幽谷

人が足を踏み入っていない静寂に包まれた自然。

▼「深山」は遠く人里離れた奥深い山、「幽谷」は山奥の静かな谷のこと。

例 深山幽谷に入り、しばし俗世間のことを忘れる。

参差錯落

物が一樣でなく、いろいろ入り混じっていること。

▼「参差」は物が不揃いなさま、「錯落」

▼「神韻」は人間業とは思えない優れた趣。「縹渺」は果てしなく広いさま、かすかではっきりしないさま。

例 神韻縹渺の境地に達した名画。

人海戦術

ある目的を達成するために大勢の人を動員すること。

▼「人海」は、大勢の人が集まって海のように見えるさま。

例 思わぬアクシデントで作業が大幅に遅れた。人海戦術で遅れを取り戻そう。

心機一転

あることをきつかけに、気持ちを切り換えて直すこと。よい方向、明るい気持ちへ変化するときを使う。

▼「心機」は心の働きや気持ちの意。

例 昨年は不運なことが続いたが、年も改まったことだし、心機一転、飛躍の年にしてみせる。

は入り混じることの意。

例 参差錯落とした大都会。

人事不省

気絶すること。昏睡状態に陥って意識不明になること。

▼「人事」は人としての意識の意。

例 車にはねられ、人事不省のまま病院に運ばれた。

類 意識不明（いしきふめい）、前後不覚（ぜんごふかく）

唇齒輔車

お互いの利害が結びついていて助け合う関係。持ちつ持たれつの関係。切っても切れない関係。

▼「輔車」は、車輪を補強する添え木と車で、唇と歯同様、密接な関係がある。

例 彼とは唇齒輔車の関係です。
唇に歯寒（しんぱうしかん）

神出鬼没

不意に現れたり消えたりして、居どころがつかめないこと。

▼「神」「鬼」は不思議な力を持つ神霊のこと、鬼神のように自在に出没することからきた語。

神出鬼没の怪盗。

類例 神出鬼行（きこう）、神変出没（しんべんしゅつぽつ）

尋常一様

ごく普通の当たり前のこと。他と変わりがなくこと。

▼中国の周の時代、「尋」は八尺（一・八四メートル）、「常」は一丈六尺（三・六八メートル）で、ごくありふれた長さだったことからきている。

例 あのとときの恐怖は尋常一様ではなかった。

信賞必罰

功労者には、その功に見合う賞を、罪を犯した者には必ず罰を与えること。賞罰を厳格に行うこと。そのような人使いの心構えをいう。

例 信賞必罰を実行してこそ人はついてくる。

針小棒大

針の頭ほどの小さなことを棒のように大きく言う。物事に尾ひれをつけて大げさに言うことのとえ。

例 彼の話は針小棒大だ。

新進気鋭

ある分野に登場した意気込みの鋭い将来性豊かな新人。

例 新進気鋭の諸君に存分の働きを期待している。

類 少壮有為（しょうそうゆうゐ）

人心恟恟

世の中の人々が恐れおののくこと。

▼「恟恟」は恐れておののくさま。

例 凶悪な殺人事件が連続して起こり、人心恟恟に陥った。

人心収攬

たくさん人の心を上手につかんでまとめること。人々の信頼や人気を集めること。

▼「収攬」は収め、まとめるという意味。

例 人心収攬の術にたけているだけに次期社長と目されるのも当然だ。

人跡未踏

今までに人が足を踏み入れていないこと。また、人が手をつけていない分野のたとえ。

類例 人跡未踏の秘境にわけ入る。
前人未踏（ぜんじんみとつ）

じんしんきようきよう

迅速果斷

進退両難

進むのも退くのも困難なこと。動きが取れず、にっちもさっちもいかなくなること。

例 情勢が激変したからにはこの事業を中止したい。しかし、すでに多額の投資をしていることを考えると、進退両難ここにきわまつた。

新陳代謝

生命を保つために必要なものを取り入れ、不要なものを排泄する作用。これが転じて、古いものが少しずつ新しいものに入れ代わっていくという意味にも使われる。体制や人事を刷新する場合にもいう。

震天動地

【類】物質(ぶつしつ) 代謝、新旧交替(しんきゆうこうたい)

天を震わし、地を動かす。そのように激しいことから、大事件や異変が起り、人々を驚かせること。また、物音や勢いがものすごいことをいう。

【例】汚職事件は過去、何度も起こっているが、今回の汚職疑惑は震天動地、内閣総辞職もあり得る。

【類】驚天動地(きょうてんどうち)、震地動天(しんちどうてん)、震天駭地(がいち)

心頭滅却

どんなに苦しく、つらいことであっても、心を無にすれば、それを感じないでいられる。つまり、雑念を消しなさいという教え。

【例】心頭滅却すれば火もまた涼し。
無念無想(むねんむそう)

【類】人頭畜鳴(しんとうちくめい)

森羅万象

この世に存在するありとあらゆるものの、この世で起こるすべての事柄をいう。

【例】「森羅」は、森の樹木のように無数に連なること。「万象」は、あらゆる物事、いろいろな形のこと。

【類】森羅万象に通じた博学の士。

【類】一切合切(いっさいがっさい)、天地万物(てんちばんぶつ)

辛勞辛苦

とてもつらい目にあい、苦勞すること。

【例】「辛勞」「辛苦」ともに、非常に苦しいという意味。「心勞」と書くとき、心づかいや精神的疲勞の意味になるので誤り。

【例】父親が莫大な借金を残して亡くなったため、辛勞辛苦をなめてきた。

【類】艱難辛苦(かんなんしんく)、千辛万苦(せんしんばんく)

深謀遠慮

物事を深く突きつめ、将来のことまで見通して考えること。用意周到に計画を練ること。必ずしもいい意味では使われないことが多い。

【例】「深謀」は深い謀(はかりごと)。「遠慮」には慎重深いという意味があるが、この場合は遠い先々のことまで見通した考えのこと。

【例】自分が有利になるよう、常に深謀遠慮を巡らす人物。

【類】深慮遠謀(しんりょえんぼう)

人面獸心

人の顔をしているが、心は獣であるということ。冷酷で無慈悲な人、人から受けた恩や情れを感じない人、人情のない人をいう。

【例】「人面」は「にんめん」とも読む。
目的を達するためには悪らつなことも平気でやる人面獸心の男。

す

醉眼朦朧

酒に酔い、目の焦点が定まらなくなっている。目がぼんやりしている様子。

【例】昨夜は酔眼朦朧としていたが、ちゃんと帰れたのか。

【類】醉歩蹢躅(すいはまんさん)

随喜渴仰

深く仏に帰依し、厚く信仰するという仏教語だが、ある物事に進んで取り組むという意味でも使われる。

【例】「随喜」は喜んで仏に帰依すること。心からありがたい、うれしいと思うという意味もあり、「随喜の涙」という言葉がある。

【例】「渴仰」は、渴すれば水を思い、山に向かえば高みを仰ぐという意味から深く仏を信仰することという。

水魚之交

【例】 本人の希望で職場を変えてみたら、随喜
 湯仰して仕事するようになった。
 魚は水の中でしか生きていられない。この
 ように、互いに離れることができないほど
 親密な間柄。非常に仲がよく、固く結ばれ
 ている友情。「すいきよのまじわり」と
 も読む。

【故】 三国時代、蜀の劉備が自分と諸葛孔明と
 の親密さをこう説明したという。

【類】 管鮑（かんぼう）之交、刎頸之友（ふん
 けいのとも）

醉生夢死

酒に酔い、夢の中にいるような心地で生涯
 を終えることから、有意義なことは何一つ
 せず、ただばんやりと無駄に一生を過ごす
 ことのとえ。

【例】 親の遺産があるから醉生夢死でいられる
 のだろうが、それでは生まれてきた意味がな

【類】 水天一色（いつしよく）、水天一碧（い
 つべき）

醉歩蹣跚

酒に酔って、ふらふらとおぼつかない足ど
 りで歩く様子。千鳥足。

▼「蹣跚」は「ばんさん」とも読み、よろ
 めくことの意味。

【類】 醉眼朦朧（すいがんもうろう）

頭寒足熱

読んで字の如く、頭は涼しく、足は暖かく
 しておくこと。寝るとき、これとは逆に頭
 が暖かく足が冷たいと、なかなか眠れない。
 頭が暖かいということは、血液が脳にたく
 さんあるためで、一種の興奮状態というの
 が東洋医学の考え方。足を暖めれば脳の血
 液は下がっていき、興奮状態がおさまると
 されている。つまり、健康法の一つ。

寸進尺退

せ

いぞ。

【類】 無為徒食（むいとしよく）、遊生夢死
 （ゆうせいむし）

翠帳紅閨

美しく飾った高貴な女性の寝室。貴婦人の
 豪奢な生活のたとえとしても使う。

▼「翠帳」は、翡翠（かわせみの異称）の
 羽で飾った帳（とまり）カーテンのこと）。

【例】 「紅閨」は、赤く塗った婦人の寝室、居間。
 彼女は翠帳紅閨で育った真正正銘のお嬢
 様。

水天髣髴

遠い沖合の海を眺めると、空と海の水との
 境が見分けられないことがある。そのよう
 なさまをいう。

▼「髣髴」は「彷彿」とも書き、はっきり
 せず、ばんやりしていること。

【例】 春霞のたなびく水天髣髴の眺めに、しば
 し見とれる。

寸善尺魔

一寸進んで一尺退く。一寸は約三センチ、
 一尺は約三〇センチなので、少し進んで大
 きく退くという意味。転じて、得るものが
 少なく、失うものが多いことのとえ。

【例】 新製品の開発は寸進尺退で、展望が開け
 ない。

世の中にはよいことが少なく、悪いことが
 多いというたとえ。また、「好事魔多し」
 と同じ意味で、よいことというのは妨げる
 ものが多く、なかなか成就しないことをい
 う。

【例】 もう一步のところまでいっていったのに邪
 魔が入った。寸善尺魔とはよく言ったものだ。

青雲之志

せ

立身出世を望む心や功名心。また、俗世間
 を超越して高潔であろうとする思い、俗世

間から逃げ出したいという願望をいう。立身出世を願うという意味で使うことが多い。

▼「青雲」は青空を流れる雲で、これが転じて学問や道徳、また高い位を表す。

例 青雲の志を抱いて上京した。
凌雲（りょううん）之志

晴好雨奇

山水の景色の見事さは、晴れた日はもちろんのこと、雨の日でもまた違ったおもむきがあって味わい深い。景観が晴れの日、雨の日、それぞれに素晴らしいことをいう。

晴耕雨読

田舎でのんびりと暮らすこと。自然に逆らうことなく、心おだやかに暮らすこと。農家の人は晴れた日に田畑を耕す。それができないうちの日は家で本を読んで過ごす。このように自然のありようとともに生活することからきている。俗世間から離れた生活

似をしたところ、村人たちは恐ろしがって逃げたという。

誠心誠意

うそ偽りのない心。私心を捨てて誠実に物事に取り組むこと。

例 彼のように、他人のことも誠心誠意、面倒をみる人は珍しい。

正堂堂

卑怯なことをせず、態度や手段が正しくて立派なこと。また、後ろ暗いところがなく、自信に満ちているさまをいう。

生生流転

万物が絶えず生まれ変わり、状況や境遇が移り変わっていくことをいう。また、定めがないこと。

▼「生生」は「しょうじょう」とも読み、ものが絶えず生まれ、活動するさま。「流転」は、あらゆるものが因果に支配されて

生殺与奪

や、老後の理想的な生活の意味で使われることが多い。

例 退職後は実家に帰って晴耕雨読の生活を送るつもりだ。

生かすのも殺すのも、与えるのも奪うのも思いのままであること。相手を自分の思いどおりに支配することのたとえ。「殺生与奪」ともいう。

例 生殺与奪の権を私が握っている以上、わがままは許さない。

活殺自在（かつさつじざい）

西施捧心

むやみに人の真似をして笑う者になることのたとえ。

例 中国の春秋時代、西施という美女がいた。彼女は胸の持病のため、時折り胸をおさえて眉をひそめることがあったが、その様子がまた美しかった。それを見た醜い女が西施の真

種々の境界・地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道をめぐること。

例 これまで何度も浮き沈みを経験してきた。人生はまさしく生生流転だ。

例 生死（しょうじ）流転、万物（ばんぶつ）流転、流転輪廻（りんね）

清濁併呑

きれいな川も濁った川も受け入れる海のように、善悪の区別なく、物事があるがままに受け入れる度量の広さをいう。現在では、「清濁併呑」という表現が一般的。

例 政治家には清濁併呑の器量が必要だ。

井底之蛙

「井の中の蛙（かわず）、大海を知らず」と同じ意味。自分の狭い知識にとらわれて、広い世界のことが見えないことをいう。世間知らず。

青天霹靂

「寝耳に水」と同じ意味で、突然、思いもよらないようなことが起こること。

▼「霹靂」は急に聞こえてくる雷の意で、よく晴れた空に突然、雷が鳴ることからきている。

【例】私が次期社長に指名されるとは青天霹靂だ。

青天白日

青く澄んだ空と白く輝く太陽。つまり、よく晴れ渡った天気や指し、これが転じて、後ろ暗いところ、やましいところがないことをいう。疑いが晴れるという意味もある。

【例】彼のように青天白日の人間を疑うとはとんでもない。

【類】清廉潔白（せいれんけつぱく）

清風明月

すがすがしい夜風と明るい月。転じて美しい自然をいう。自然を相手にした風流な遊びの意味もある。

精力絶倫

【例】今夜は清風明月を愛でながら酒をくみかわそう。

【類】清風朗月（ろうけつ）

元気がよくて活動的なこと。人並みはずれた行動力があること。また、そのような人という。

▼「精力」は気力、「絶倫」は他に比較するものがないほど優れていることで、必ずしも性的なことを意味しているわけではない。

【例】徹夜明けとは思えない元気さは、精力絶倫の評判とおりだ。

【類】精力旺盛（おうせい）

勢力伯仲

互いの力にはほとんど差がないこと。

▼「伯」は長兄、「仲」は次兄を意味し、これが転じてよく似ていて格別の違いがないことをいうようになった。

精励恪勤

【例】この試合は勢力伯仲のチームが戦うから面白い展開になるぞ。

仕事や勉学にいそしむこと。精力を傾けて励む様子。

▼「恪」には慎むという意味があり、「恪勤」は職務に忠実に勤めるという意味。

【例】子供の頃から精励恪勤していた彼のことだから、今日の成功も当然というものだ。

【類】精励勤勉（きんべん）、刻苦勉勵（こくくべんれい）、奮勵努力（ふんれいどりよく）

清廉潔白

心や行いが清く正しく、後ろ暗いところが全くないこと。

▼「廉」は、いさぎよい、行いが正しい、私心がないという意味。

【例】私が疑われているようですが、私は清廉潔白です。

積薪之嘆

【類】清淨（せいじよう） 潔白、青天白日（せいいてんはくじつ）

あとから来た者が優遇され、永年勤めてきた者が冷遇されてしまうことの嘆きという。古い薪（まき）の上に新しい薪が積み重ねられていくため、下にある薪はいつまでたっても使われないことからきている。

【例】人事にあたつては、積薪之嘆を抱く社員が出ないように心がけた。

積善余慶

よい行いをする、その報酬として子孫に至るまで幸福でいられるということ。「積善の家には必ず余慶あり」の略。

▼「余慶」は、功德の報いが一代に止まらず、子孫にまで残るという意味。

【例】両親の積善余慶があればこそ、今の私がある。

【類】 善因善果（ぜんいんぜんか）
是是非非

よいことはよい。悪いことは悪い。このように公正無私に正しく判断すること。道理によって客観的に価値を論じること。「是非」を強調した言葉。

【例】 是非非非の態度で議長を務める。

切磋琢磨

友人や仲間が互いに競い合い、励まし合って、学問、技術などが共に向上すること。玉や石を細工するとき、刀や斧で切り、やすりで磋（みがき）、ノミやツチで琢（うち）、砥石で磨（みが）いて美しく仕上げることからきており、もともとは自分の人格をみがくことを言った。

【例】 大学時代から切磋琢磨してきた親友。

切齒扼腕

非常に悔しがること。悔しくて怒り狂うこと。

世道人心

世の中の道徳と世間の人の心。

【類】 風前之灯（ふうぜんのともしび）
 【例】 絶体絶命の危機を、からくも乗り越えた。

絶体絶命

逃れようのない場面、立場に追い込まれて進退きわまつた状態。体も命もきわまるという意。

【例】 「絶体」を「絶対」と書くのは誤り。「絶体」も「絶命」も、九星占いでいう凶星だとする説がある。

と。
 ▼「切齒」は歯ぎしりすること、「扼腕」は激しく意気込んで自分の手首を握りしめること。「腕」は漢文では手首の意。
 【例】 もう少しのところで大物を釣り落とし、切齒扼腕した。
 【類】 残念無念（ざんねんむねん）

是非曲直

【類】 少年犯罪の多発が深刻な問題になっているが、これは世道人心の乱れが原因だ。

正しいことと正しくないこと、道理にかなっていることとそうでないことをいう。

▼「是」「直」は正しいこと、「非」「曲」は間違っていることのこと。

【例】 もう大人なんだから是非曲直をわきまえなさい。

【類】 是非善悪（ぜんあく）、理非（りひ）曲直

浅学非才

知識が浅く、才能に乏しいこと。自分の識見を謙遜して使うのが普通。

▼「非」は、薄いという意味の「非」の代用漢字。

【例】 大変なおほめの言葉をいただきました、浅学非才の私には身に余る光栄でございます。

【類】 浅学短才（たんさい）、浅識（せんしき）

千客万来

【類】 非才、浅知（せんち） 短才

大勢の客が入れ代わり立ち代わり入ってきて賑わうこと。「門前市をなす」と同じ意味。

▼「千」と「万」を重ねて強調した語で、「せんかくばんらい」とも読む。

【例】 値段が安くておいしいのだから、千客万来も当然だ。

千軍万馬

【類】 門前成市（もんぜんせいし）
 たくさんさんの兵士と軍馬。何度も戦争を体験してきた歴戦の強者のたとえ。これが転じて、修羅場をくりぬけてきてきたたかになった人、ある分野の経験が豊富な人という。

【例】 あなたのような千軍万馬の古強者に来ていただいて実に心強い。

【類】 海千山千（うみせんやません）、千兵

先見之明

（せんべい）万馬、百戦錬磨（ひやくせんれんま）

将来のことは見抜く鋭い眼力。何か事が起こる前に見抜く見識。

例 こんな大きな道路をつくって税金の無駄づかいだと批判された市長だったが、今の発展を見ると先見之明があったと感服する。

千言万語

いろいろと言葉を尽くして言うこと。くどくどと長たらく話すこと。

例 千言万語を費やすよりも行動で示したほうが理解される。

類 千言万句（ばんく）

千古不易

永遠に変わらないこと。時代が変わっても普遍的価値があること。

▼「千古」は時間が無限なこと。「不易」

千差万別

ふほく、曇華一現（どんげいちげん）
物事の種類や様子にはさまざまな違いがあること。

▼「万別」は「まなべつ」とも読む。

例 人の価値観は千差万別だ。

類 十人十色（じゅうにんというろ）、千種（せんしゆ）万別、千姿万態（せんしばんたい）、多種多様（たしゆたよう）

千思万考

あれこれと思索すること。一つのことについて繰り返し考え、さまざまな角度から検討すること。

例 この事業は絶対に失敗が許されない。千思万考して最良のプランを練ろう。

類 千思万想（ばんそう）、千思万慮（ばんりよ）、千方百計（せんほうひゃくけい）、百術千慮（ひゃくじゆつせんりよ）

は変わらないこと。

例 いつまでも好景気が続くことはない。これは千古不易の真理だ。

類 千古不拔（ふはつ）、万古（ばんこ）不易

前後不覚

前後の区別もつかなくなるほど正体がなくなる。何が起こったのか、何をしたらのか、全く覚えがなくなる。

例 飲みすぎて前後不覚になった。人事不省（じんじふせい）

千載一遇

千年に一度しか出会えないような、めったにない素晴らしい機会。またとない絶好の機会。

▼「載」は「年」の意。「一遇」は一度遭えること。

例 千載一遇の好機を逃さず勝負に出る。

千紫万紅

色とりどりの花々が一面に咲き乱れているさま。転じて、そのように華やかであることのたとえ。

▼「紫」と「紅」が、あでやかな色彩を代表し、「千」と「万」で色彩の豊かさを強調している。

例 ため息が出るような千紫万紅の着物。

類 千紅万紫（せんこうばんし）、万紫千紅（ばんしせんこう）、百花繚乱（ひゃっかりょうらん）

千姿万態

姿かたちやありさまが種々さまざまであること。また、状態がいろいろと変化すること。

例 初詣という、昔は和服一色だったものだが、今は人さまざまで千姿万態だ。

類 千状（せんじよう）万態、千態万状（せんたいばんじよう）、千態万様（ばんじよう）

浅酌低唱

千差万別（せんさばんべつ）
 ほどよく酒を飲み、小声で歌を口ずさむこと。また、そのような小さな酒宴、上品な酒席のたとえ。

▼「浅酌」は軽く酒を飲むこと。「低唱」は低い声というのではなく、小声で歌うこと。低音で歌うことは「低吟」という。

例 人格者ばかりが集まっているだけあって、あの酒席は浅酌低唱だな。

類 浅酌微吟（びぎん）、浅斟（せんしん）低唱

千秋万歳

長生きを願ったり、祝ったりするときの言葉。

▼「秋」と「歳」は年のこと。「万歳」は、万年生きるということから祝福を表す言葉になった。

類 恩師の千秋万歳をお祝いする。

悪い予感におびえてびくびくすること。本来は「戦戦兢兢」と書く。

▼「兢兢」は緊張してびくびく、はらはらしている様子の意。「兢」が常用漢字にないため、「恐」を使うことが多い。

例 うちの親父は怒りつづけて、子供の頃は戦戦兢兢としていた。

類 戦戦兢兢（せんせんりつりつ）

前代未聞

今までに聞いたことがないようなできごと。かつてない珍事。

▼「前代」は「ぜんだい」とも読み、今より前の時代を指す。

例 前代未聞の大事件が起こった。
 類 空前絶後（くうぜんぜつご）、先代（ぜんだい）未聞

全知全能

すべてのことを知っていて、すべてのことをなしとげられる能力。欠けているものが

類 千秋万古（ばんこ）、千秋万世（ばんせい）
 体力と精神力のすべて。

全身全霊

▼「全霊」は魂全体のこと、すべての精神力を意味する。

例 生涯の代表作に仕上げるべく全身全霊を傾ける。

類 全知全能（ぜんしんぜんりよく）、全霊全力

前人未踏

未だかつて誰も足を踏み入れたことがないこと。地理的な場所に限らず、今まで誰も到達したことがないという意味で「前人未到」とも書く。

例 前人未踏のジャングル。
 類 前人未踏（ぜんじんみとう）

戦戰兢兢

何一つなく完全であること。「全知全能の神」という表現をするのが普通で、人間に關しては否定的に使うことが多い。

▼「全知」は「全智」とも書く。

例 私は全知全能ではない。何でもできると思われては困る。

類 完全無欠（かんぜんむけつ）、十全十美（じゅうぜんじゅうび）

前途多難

行く先々に多くの困難が待ち構えていること。また、そのような予感をいう。

▼「前途」は目的までの道のり、先行きのこと。

例 私の最も好きなことができるのだから、前途多難といえどもこの道を行く。
 類 前途遠（りようえん）

前途洋々

将来の見通しが明るいこと。先行きに展望が開けていて、希望に満ち満ちているさま。

▼「洋洋」は水がたっぷり満ちている様子。
 例 卒業していつ諸君には前途洋々たる未来がある。大きな志をもつて頑張てほしい。
 類 前途有為（ゆうい）、前途有望（ゆうぼう）、鹏程万里（ほうていばんり）

前途遠遠

行く先の道のりがはるかに遠いこと。目的を達するまでには長い時間がかかり、すぐには望みがないようにないこと。あまりの遠さに気をくじかれそうな場合に使う。
 ▼「遠」も遠いという意味で、「遠遠」は、どれほどの時間がかかるのか見当がつかないほど遠いことを表す。

例 予想以上にトラブルが相次いで、この計画は前途遠遠だ。

善男善女

仏教を信仰する人々、お寺参りをする人々をいう仏教語。一般大衆の意味で使うことが多い。

状況がさまざまに変化すること。刻一刻と移り変わること。

▼「千変」は「せんべん」とも読む。

例 千変万化する情勢に適切に対応することが大事だ。

類 变幻自在（へんげんじざい）

千万無量

計り知れないほど量が多いこと。

▼「千万」は「せんばん」とも読む。

例 これまでに何度も修羅場をくぐり抜けて今日まで来たことを思うと、千万無量の感がある。

先憂後樂

先に苦勞しておけば、後々に楽ができるということ。また、人の上に立つ者は、世の人々が気づかないうちから心配事を心にとめて処置し、世の人々が楽しむのを見届けてから楽しむべきだという戒め。もとは政治家の心がけを表した語。

例 善男善女で賑わう夏祭。

千波万波

押し寄せてくるたくさんさんの波。また、次々とやってくるもののたとえとしても使われる。

例 宝くじに当たったことを知った親類、知人が千波万波とやってきて金の無心をするので閉口した。

千篇一律

詩や文章が、どれも同じ調子で作られていること。転じて、どれもこれも変わりばえがせず、面白みのないこと。ワンパターン。
 ▼「千篇」は「千編」とも書く。「律」は音楽の調子。

例 斬新な企画が少しは出てくるかと期待していたが、どれも千篇一律だ。

類 一本調子（いっばんぢょうし）

千變万化

例 先憂後樂と思えば、苦勞もいとわずにやれる。

千里同風

千里先まで同じ風が吹いているということから、世の中が平和でおだやかなこと。また、ある風俗が国の隅々にまで行き渡っているさまをいう。

例 ようやく戦乱が治まり、千里同風の地となった。

類 万里（ばんり） 同風

千慮一失

どんなに賢い人であっても、たくさんさんの考えの中には一つぐらい失策はある。そのようなちよつとした間違ひ。また、「弘法も筆の誤り」、「猿も木から落ちる」と同じで、思わぬ失策という意味もある。

例 千慮一失は誰にでもある。気にすることはない。

類 知者（ちしや）一失、百慮（ひやくりよ）

一失。

そ

粗衣粗食

粗末な衣服と粗末な食事。

▼「衣食」は生活そのものを指し、衣服と食事だけでなく、生活が質素であることをいう。

例 彼は大金持ちになった今でも、決しておごることなく、粗衣粗食の暮らしをしている。

類 悪衣悪食（あくいあくしょく）、節衣縮食（せつしゆくしょく）、草衣木食（そういもくしょく）

喪家之狗

元気がなく、しょんぼりしている人。ひどくやつれている人。定まった家がない人。

▼「狗」は「いぬ」とも読む。喪中の家では、皆が葬式のために忙しく働いているため犬に餌をやるのを忘れてしまい、犬がや

造次顛沛

ほんの束の間にも努力を怠らないこと。転じて、わずかの間、一瞬の間。また、危急の場合やあわただしい場合のこと。

▼「造次」は忙しく、あわただしいこと。「顛沛」はつまずき、倒れること。また、さまよい歩くこと。

例 司法試験を目指してアルバイトしながら造次顛沛している。

類 終食之間（しゅうしょくのかん）

宋襄之仁

情けをかけて、かえってひどい目にあうこと。

故 春秋時代、宋の襄公が楚の軍隊と対戦したとき、「楚の布陣が完了しないうちに攻撃しましょう」という進言をしりぞけ、「人が困っているときに苦しめるものではない」として攻めなかった。そのために敗れてしまったという。

そ

つれてしまうことからきた語。

例 昔の会社の上司を街で見かけたが、何があったのか、喪家之狗といった様子なので声をかけられなかった。

糟糠之妻

貧しいときから連れ添い、苦労を共にしてきた妻。

▼「糟糠」は酒かすと米ぬかで、粗末な食べ物、貧しい暮らしの意。

例 人気スターになったとたん、長年の下積み生活を支えてきた糟糠之妻を離縁するのは、ひどい男だ。

相思相愛

お互いに相手を慕い、愛し合っていること。普通は、男女の仲をいう。お互いの意思が一致している状態を表すときにも使われる。

例 相思相愛だった会社同士が合併した。

漱石枕流

例 心を入れ替えて真面目に働くというから解雇しなかったのに、会社の金を盗んで逃げてしまった。宋襄之仁というやつだな。

誤りを指摘されても直そうとしないこと。負け惜しみが強く、何かとこじつけて言い逃れること。

故 隱棲を決意した孫楚（そんそ）という男が友人に「石を枕にして流れで口をすすぐ」と言うべきところを、「石で口をすすぎ、流れを枕しよう」と言い間違えてしまった。それを友人に指摘されたが、誤りだとは認めず、「石で口をすすぐのは歯をみがくため。流れを枕するのは汚れた話を聞いた耳を洗うため」と言い張ったという。

例 彼の漱石枕流には腹が立つよりも笑ってしまふ。

類 牽強附会（けんきょうふかい）、孫楚漱石（そんそそうせき）

滄桑之變

世の中の移り変わりが激しいこと。

▼「滄桑」は「滄海桑田」の略で、青々としている海と桑畑のこと。桑畑だった土地が海となり、海が干上って桑畑になるということからきている。

例 十年ぶりにこの地を訪れたが、まるで様変わりしていて、滄桑之變の感がある。

類 滄海桑田（そうかいそうでん）、桑田碧海（へきかい）、陵谷遷貿（りようこくせんぼう）

相即不離

互いに深く結びついていて、切り離すことができないほど密接な関係。また、二つのものが一つに溶け合っていること。

▼「相即」は仏教語で、万物は縁によって成り立ち、互いに影響しあっている。本質的に一体であり、区別することはできないという意味。

即断即決

チャンスを見逃さず、即座に決断すること。何かを決めるとき、迷うことなくすぐに決断を下すこと。「即決即断」ともいう。

例 いつもながら社長の決断は即断即決で小気味がいい。

類 当機立断（とうきりつだん）、迅速果敢（じんそくかかん）

則天去私

私心を捨て、自然の法則にしたがってありのままに生きること。そのような境地。

▼「則天」は天地自然の法則にしたがうこと。

例 田舎に帰って則天去私の心境で暮らそうと思つたが、なかなかそうはできないものだ。

相上之鯉

他人に自分の運命を握られていて、どうしようもない状態。まな板の上に置かれて料

例 人間と自然界とは相即不離の関係にある。

類 一心同体（いっしんどうたい）、表裏一体（ひよりりいつたい）

即身成仏

凡人でも、この世で悟りを開けば、生きているままで仏になれるという真言密教の教義。

類 即身是仏（ぜぶつ）、即身菩薩（ばさつ）

速戦即決

短時間で一気に決着をつけること。物事をてきぱきと片付けること。

▼「速戦」は戦いを長期化させることなく、短時間で勝負をつける戦法。

例 彼の速戦即決の仕事ぶりはたいしたものだと感心するが、ミスをしないか、ちよつと心配でもある。

類 短期決戦（たんきけっせん）

粗製濫造

粗悪なものをたくさんつくること。

▼「粗製」は雑で粗末なつくりかた。「濫造」は「乱造」とも書き、何の計画性もなく、やたらにつくること。

例 プームに乗って粗製濫造していれば、今は売れているかも知れないが、そのうち消費者から見放される。

率先躬行

人より先に進んで実行すること。

▼「率先」は人の先に立つて行うこと。「躬行」は自分から行うこと。

例 口で言うより率先躬行したほうが人はつ

率先垂範

【類】 実践躬行（じっせんきゆうこう）、率先垂範（すいはん）、率先励行（れいこう）
人より先に実行して周囲の手本となること。

▼「範」は竹の枠、型の意で、「垂範」は模範を示すこと。

【類】 実践躬行（じっせんきゆうこう）、率先励行（れいこう）

樽俎折衝

酒席などでなごやかに談笑しながらも、相手の氣勢を上手にかわして交渉を有利に進めること。

▼「樽俎」は酒樽と酒の肴を載せる台。そこから酒や料理が並ぶ宴会の席を指す。

【例】 先日の商談では、まんまと相手の樽俎折衝の術中にはまった。

大器晩成

仏の加護により、事が成就すること。

▼「大願」は「だいがん」とも読み、もとも仏が衆生を救おうとした誓願。

【例】 この映画をつくることができて大願成就、もう思い残すことはない。

ほんとうの大人物は時間をかけて実力を養い、頭角を現してくるものだということ。大きな器をつくるには時間がかかることからきている。

▼「大器」は器量の大きい人を指し、このような人物が若いころから目立つことは少ない。

【類】 あなたのお子さんは大器晩成型ですよ。

【類】 大才（たいさい） 晩成

大義名分

行為の基準となる正当な根拠や論理。

▼「大義」は人として尽くすべき道。「名分」は身分を示す名に応じて守るべき道徳

大廈高樓

大きくて高い建物。豪壮な建物。

▼「廈」は家、「樓」は二階建て以上の建物の意。

【類】 大廈高樓の立ち並ぶ大都会、百尺之室（ひやくしやくのしつ）

大喝一声

大きな声で叱りつけること。また、そのどなり声をいう。

▼「喝」は、迷いなどを叱り、悟りへと導くための禪宗の掛け声のこと。

【例】 成人式で騒ぐ若者たちを市長が大喝一声した。

【類】 大吼（たいこう・たいく） 一声、大声一喝（たいせいいつかつ）

大願成就

長年にわたる願いがかなえられること。神上の本分。

【類】 生活を便利にするという大義名分の下、自然を破壊している。

对牛弹琴

「馬の耳に念仏」と同じ意味で、相手にこちらの意思が全く通じないこと。効果がなく無駄なこと。愚かな人に難しい話をする。牛に向かつて琴を弾いたところで、牛にその音色の素晴らしさは分からないことからきている。

【類】 学ばうという意思がない者に教えても対牛弹琴でしかない。

【類】 馬耳東風（ばじとうふう）

大言壮語

とうとう自分にはできそうもないことを、できるように威張って言うこと。大風呂敷を広げること。

▼「大言」は大げさな言葉、「壮語」はえらそうな言葉。

【例】取引先の社長と親しいからまかせておけと言ったが、大言壮語する彼のことだから当てにはできない。

【類】壮言大語（そうげんたいご）、放言高論（ほうげんこうろん）

大悟徹底

物事の本質・真理を悟り、さまざまな欲望や迷いから吹っ切れた心境になること。

▼「大悟」は仏教語で、「だいご」とも読み、執着心や煩惱を断ち切り、すっかり悟るという意味。

【例】宇宙から地球を見れば大悟徹底できるかも知れない。

【類】廓然（かくぜん・かくねん）大悟、恍然（こうぜん）大悟

泰山北斗

一つの分野で名をなし、世間から権威を認められ、尊敬されている人。ひらたく言えば第一人者のこと。略して「泰斗」という

親世音菩薩が衆生を救おうとする廣大無辺の慈悲のこと。

▼「慈」は衆を与えること、「悲」は苦しみを取り去ることの意。

大所高所

個々の細かいことにはこだわらず、広く大きな視野から見ることでできることをいう。

▼「大所」は全体を見渡すことができる広い視野、「高所」は見通しがよくきく高い場所。

【例】リーダーたるもの、大所高所から判断できる資質がなくてはならない。

泰然自若

どんなことが起ころうともあわてず騒がず、ゆつたりと落ち着きはらっていること。いざというとき、どつしりと構えて事に対処すること。

▼「泰然」は落ち着いていて物事に動じな

ことが多い。

▼「泰山」は中国で名山とされている五岳の一つで、秦・漢の時代から天子が天を祭った山。「北斗」は北斗七星のこと、天の中心に近く位置していることから尊い星とされていた。そのことから、「泰山」も「北斗」も、人々が仰ぎ見るものの意。今日では、略して「泰斗」ということが多い。

【類】天下無双（てんかむそう）、天下無敵（むてき）

大山鳴動

大きな山がうなりを発して揺れ動くこと。大きな騒ぎのたとえ。

【類】古代ローマの詩人ホラティウスが、大げさな表現を好んで使う詩人たちを批判して、「山々が陣痛を起こし、生まれてくるものは小鼠一匹に過ぎない」と評したという。

【例】大山鳴動して鼠一匹。

大慈大悲

い様子。「自若」は普段の様子と変わらないことをいう。

【例】冬山で遭難して助かったのは、彼が泰然自若として我々を導いてくれたからだ。

【類】神色（しんしよく）自若、神色泰然、余裕綽綽（よゆうしゃくしゃく）

大胆不敵

普通の人ならこわがったり、遠慮したりしてしまふようなことでも臆することなく、度胸が据わっていること。また、その様子。

▼「不敵」は「敵せず」と訓読し、敵を敵とも思わないという意味。

【例】警察署の前のビルに盗みに入るとは、なんと大胆不敵な泥棒だな。

【類】剛胆（こうたん）不敵

大同小異

少し異なる点があるものの、全体として見ればだいたい同じであるということ。似たりよつたり。五十歩百歩。「小異を捨てて

大同団結

大同につく(細かい違いは無視して大筋で合意する)は、この語からきている。

例 同工異曲(どうこういきよく)

共通の目的に向かって、いくつかの団体や党派が、多少の意見の違いを乗り越えて一つにまとまること。

例 古い体制を打破しようという思いは同じなのだから、ここは大同団結しようではないか。

大兵肥満

身体が大きき太っていること。また、そのような人をいう。偉丈夫。

▼「大兵」は、体格がいいという意味で、反対語に「小兵」(こひょう)がある。

例 小兵なのに、大兵肥満の男に立ち向かうとはたいした度胸だ。

多岐亡羊

反面教師(はんめんきょうし)

多士済済

優れた人物が揃っていること。また、その様子をいう。

▼「士」は学問・道徳を備えた立派な人物を指す。「済済」は人数が揃っていて盛んな様子の意で、「さいさい」とも読むが、厳密に言えば誤り。

例 今年の新人社員は多士済済で、将来が案しめだ。

多事多端

仕事や処理すべきことが多く、非常に忙しいこと。また、いろいろなことが起こり、落ち着かないこと。

▼「端」は物事の糸口、手がかりの意で、「多事」「多端」はともに、やることが多くて忙しいことをいう。

例 難問が山積して多事多端なので、好きなゴルフを楽しむゆとりもない。

学問の道が細分化しすぎていて、真理を捉えることができず、前途に光明を見いだせないこと。また、方針が多いため、どれを選択すればいいのか迷うこと。

▼「多岐」は、たくさん別の道。逃げた羊を探しに行ったものの、枝道が多くて見失ってしまったことに由来している。「茫洋」と書くのは誤り。

例 大学三年になって、まだ進路を決めかねているのは、それは多岐亡羊というものだ。

例 岐路(きろ) 亡羊、亡羊之嘆(のたん)

他山之石

他人の誤り、つまらぬ言行も、自分の修養の助けになったり、戒めとすることができるということ。自分の向上に役立つ悪い見本。模範、または自分には関係ないという意味で使うのは間違いない。

例 海外に工場をつくるに当たっては、日本の流弊を現地に押しつけて失敗したライバル社の例を他山之石としていた。

多事多忙(たぼう)

多事多難

事件や災難が多いこと。世情が騒がしく、穏やかでないこと。また、その様子。

例 台風に地震、凶悪事件の頻発、相次ぐ倒産と、今年は多事多難な一年だった。

多事多患(たかん)

多情多感

感受性が豊かで、ちょっとしたことに心を動かされたり、傷ついたりしやすい気質。

▼「多情」は、神経が鋭敏で感じやすいこと。また、異性への愛情が移ろいやすいこと。「多感」は、感じやすく傷つきやすいこと。

例 うちの娘は今、多情多感な年頃なので、はれものにさわるように接している。

多情多恨

物事に感じやすく、些細なことでも恨みに

思ったり、悲しんだりして悩みが絶えない様子。

例 あんなことで泣きたすとは、なんと多情多恨な人だ。

多情仏心

移り気ではあるが、薄情なことができない性質。

▼「仏心」は仏の慈悲の心のこと。

例 多情仏心な彼は、愛情がなくなった相手に対しても冷たくできない。

他力本願

自分で努力することはせず、他人の力ばかり当てにすること。本来は、自分自身の修行によって悟りを開くのではなく、阿弥陀如来の力によって成仏するという意味の仏教語。

▼「他力」は他人の助力、「本願」は仏が衆生を救うために起こした請願。

た

例 これまで他力本願で何とかあったからといって、いつもそんな調子で世渡りしていたのでは自分自身を向上させることができない。

暖衣飽食

暖かい衣服を着て、腹いっぱい食べる。つまり、物質的な要求が満たされ、安楽にぜいたくな生活を送ること。「飽食暖衣」ともいう。

例 裕福な家に生まれ、暖衣飽食に慣れきっている人だから、貧乏な暮らしは想像もつかないだろう。

類 錦衣玉食（きんいぎよくしよく）、豊衣足食（ほういそくしよく）

断崖絶壁

まっすぐに切り立った険しい崖。また、険しい崖に追いつめられたような差し迫った危険な状態をいう。

を説明する。

類 断篇（だんぺん） 零墨、片簡（へんかん） 零墨

簞食瓢飲

粗末な食事のたとえ。そこから、貧しい暮らしをしながら学問に励むことをいう。

▼「簞食」は、わりご（竹製の折り箱）一杯のご飯、「瓢飲」は、ひさご（瓢箪の器）一杯の汁物のこと。

例 若い頃の簞食瓢飲が今となってはなつかしい。

断章取義

詩文などの一部を引用し、原文の意味とは関係なく、自分に都合がいいように解釈すること。また、都合のよい部分だけを抜き出して使用すること。

▼「断章」は詩文の断片、「取義」は義を取る。

例 私の学説を断章取義に報道されてしま

彈丸黒子

狭い土地のたとえ。

▼「彈丸」は鉄砲の弾ではなく、昔、中国で使われたはじき玉のこと。弓にかけてはじき、鳥に当てて捕まえた。「黒子」は、ほくろ。

例 庭付きの家といっても、彈丸黒子ほどの庭です。

断簡零墨

書いたものの断片をいう。

▼「断簡」は古文書の切れ端。紙が発明される以前は、木簡や竹簡の端切れに文章を書いた。「零」は、しずくの意。「零墨」は、わずかな切れ端として残っている古人の筆跡。

例 断簡零墨を手がかりに、この地方の歴史

た

【類】 眞意が伝わらなかつた。
断章取意（しゅい）

胆天心小

大胆でありながら、細かいところにもで氣配りが行き届いていること。もとは文章を書くときの心得「初めに胆大を要し、終わりに心小を要す」（最初は大胆に始め、細心の注意をもって書き進めよ）。

【類】 胆天心小な彼はリーダーとして最適だ。
胆天心細（しんさい）

單刀直入

前置きや挨拶なしに本題に入り、ズバリと核心をつくこと。一振りの太刀を手にして、ただ一人、敵陣に斬り込んでいくことが転じたもの。

▼「單刀」を「短刀」と書くのは誤り。

【例】 時間がないので單刀直入に申し上げます。
【類】 單刀趣人（しゆにゆう）

短慮輕率

物事について深く考えず、軽々しい行動をとること。輕はずみで思慮に欠けること。

▼「短慮」は現実や成り行き、物事の本質を正しく見通していない浅はかな考え。「輕率」は事の善悪や成否をよく考えずに何かをすること。「輕率短慮」ともいう。

【例】 世間の注目が集まっているときだけに、短慮輕率は慎んでほしい。
【類】 輕佻浮薄（けいちょうふはく）、直情徑行（ちよくじょうけいこう）

談論風発

盛んに話し合ったり、論じたりすること。議論が相次ぐさま。

▼「談論」は談話と議論。「風発」は雄弁の形容で、吹きまくる風のように勢いが激しいことからきている。

【例】 趣味を同じくする者が集まっていたの飲み会は談論風発して、時を忘れてしまふ。

遲疑逡巡

あれこれと思い迷って、尻込みすること。しようかしまいか決しかねて、決断をずるずると引き延ばすこと。

▼「遲疑」は、いつまでも疑い、迷うこと。「逡巡」は、ためらうこと。

【例】 慎重なのはいいが、度を越すと遲疑逡巡になってしまふ。

【類】 右顧左眄（うこさへん）、狐疑（こぎ）逡巡

竹頭木屑

小さなもの、つまらぬものであっても、何かの役に立つことがあるということ。

▼「竹頭」は竹の切れ端。「木屑」はおがくず。

竹馬之友

幼い頃からの親しい友達。幼年時代、竹馬と一緒に遊んだ仲のよい友人ということからきている。

【例】 故郷に帰って一番の楽しみは竹馬之友に会えることだ。

【類】 竹馬之好（のよしみ）

知行合一

知識と行為・実践とは表裏一体であり、知識というものは行為が伴ってこそ完全なものになるということ。「ちぎようこういつ」と読むのは誤り。

【例】 知行合一をモットーにしている先生は、

魑魅魍魎

【類】 書斎にこもるような人ではなかった。
【例】 知行一致(いちち)

さまざまな化け物。また、自分が利益を得ようとして悪くみをする者のこと。

▼「魑魅」は、山林の気から生じた人に害を与える怪物。「魍魎」は、山や川、木や石の精霊。

【例】 政治の世界は魑魅魍魎の巣といった感がある。

【類】 百鬼夜行(ひゃくきやこう)、妖怪変化(ようかいへんげ)

忠肝義胆

主君や国家に忠誠を尽くし、正義を貫こうとする固い決意。

▼「肝」「胆」共にまこころの意で、「忠義の肝胆」を互い違いにした表現。

【例】 赤穂浪士は忠肝義胆の士だ。

昼夜兼行

昼はもちろん、夜も休まずに仕事すること。また、少しも休むことなく歩を進めること。

▼「兼行」には二日の行程を一日で行くという意味がある。

【例】 このイベントは大変重要だ。昼夜兼行で準備を進めてほしい。

【類】 不眠不休(ふみんふきゅう)

朝雲暮雨

男女の情交。また、男女が夢の中で結ばれること。

【例】 楚の懷王と夢の中で結ばれた巫山(ふざん)の神女が「自分は朝には雲となり、夕暮れには雨となる」と言って去っていったという。

【類】 雲雨之夢(うんうのゆめ)、雲雨巫山(ふざん)、巫山之夢

朝三暮四

【例】 張三李四と侮られてもいいから、私は平凡な人生を送りたい。

【類】 張甲李乙(ちやうこうりいつ)、張三呂四(りよし)

長身瘦軀

背が高く、やせている体。

【例】 長身瘦軀の彼は弱々しく見えるだろうが、実は剣道の達人なんだ。

彫心鏤骨

詩文などの芸術作品の完成に心を砕き、骨を折ること。また、非常に苦勞すること。

▼「彫心」は心に刻むこと。「鏤骨」は骨に散りばめること。

【例】 彫心鏤骨の末に、ようやく仕上げた会心の作。

喋喋喃喃

【類】 苦心慘憺(くしんさんたん)、粉骨碎身(ふんこつさいしん)

張三李四

平凡で、どこにでもいるようなありふれた人。また、これといって目をひくところのないつまらないものたえ。

▼「張三」は張家の三男、「李四」は李家の四男。「張」と「李」は中国人に多い姓であることからきている。

【類】 朝四暮三(ちようしぼさん)
【例】 あなたの朝三暮四にはだまされない。

親しく楽しげに語り合うさま。とくに男女の語らいうい。

▼「喋喋」は、数多くしゃべること。「喃喃」も同じ意味。

例 あのカップルは喋喋喃喃としていて、実にいい感じだね。

類 多言(たごん) 喋喋

丁丁発止

刀などで互いに激しく打ち合うさま。これが転じて、お互いに譲らず激しく議論を戦わせるという意味もある。

▼「丁丁」は「打打」とも書き、物を続けて打つ響き。「発止」は、固いものが強く突き当たる様子をいう。

例 今日の国会は政府側と野党が丁丁発止とやりあつて面白かった。

長汀曲浦

海岸線が曲がりくねりながら彼方まで続いている様子。

例 この団地は朝蠅暮蚊の輩ばかりで、なんとも住みにくい。

跳梁跋扈

悪人や好ましくないものがのさばり、権勢をほしいままにすること。

▼「跳」も「梁」も飛びはねるという意。

「跋扈」は魚を捕るときに使う籠(扈)から大魚が躍り出て逃げることから、わがままに振舞うことをいう。

例 ラッシュ時の電車内は痴漢、スリが跳梁跋扈している。

類 横行闊歩(おうこうかっぱ)、飛揚(ひよう) 跋扈

朝令暮改

朝、下した命令を夕方にはもう変更することから、命令がたびたび変えられて当てにならないこと。また、命令や法令の変更が多く、定まらないこと。

例 部長は朝令暮改なので、命令されてすぐ

▼「長汀」は長い波打ち際。「曲浦」は湾曲して内陸に入り込んでいる海辺。

例 島国の日本には長汀曲浦の素晴らしい眺めがたくさんある。

長幼之序

年下の者は年上の者に敬意を払い、むやみに先を越すようなことをしないとという一定の規律。

▼「序」は席次のこと。儒教という五倫(人を守るべき五つの道)の一つ。

例 社内の円滑な人間関係を保つには長幼之序を重んじることが大切だ。

類 長幼之節(せつ)、年功序列(ねんこうじょれつ)

朝蠅暮蚊

度量の狭い人間がはびこること。

▼「蠅」と「蚊」は小人物のたとえで、朝には蠅が、暮れには蚊が集まることからきている。

実行すると肩折り損になる。

類 朝改暮変(ちようかいぼへん)、朝改暮令(ぼれい)、三日法度(みつかはつと)

直情径行

自分の感情のおもむくままに行動し、相手の思惑や立場を思いやらないこと。自分の感情に正直ということだけをとらえ、ほめ言葉として使われることがあるが、これは誤り。本来は野蛮な振舞いをとがめる言葉。

例 部下が君についてこないのは直情径行のさらいがあるからだ。

猪突猛進

目標に向かって猪のように激しい勢いで突き進むこと。あとさきのことを考えず、相手がぶつかっていくこと。融通のきかない人が、がむしゃらに事を進めること。曲がったり、引き返したりするのが苦手な猪の動きにたとえた語。

治乱興亡

【例】失敗を恐れず猪突猛進してみたらどうだ。案外、うまくいくかも知れない。

【類】獅子奮迅（ししふんじん）、匹夫之勇（ひつぷのゆう）、暴虎馮河（ばうこひやうが）

国家や社会が治まることと乱れること。転じて、世の中の移り変わりや浮き沈み。

【例】新社屋を眺めていると、これまでの治乱興亡を思い出して感慨深い。

【類】治乱興廃（こうはい）

沈魚落雁

容姿の美しい女性のたとえ。「魚を沈ましめ、雁（かり）を落とす」と訓読し、もととは、人の目には美しく見える女性でも、魚や雁は逃げるだけ、という意味だったが、これが転じて魚や雁も恥じてかくれるほどの美貌という意味になった。

【例】あの美しさは沈魚落雁というほかない。

いには「津」がつく地名が多い。「浦」は水辺の地の意。やはり、「浦」がつく地名は多い。「津津」は「つづ」とも読む。

【例】インターネットが普及し、最新の情報が津津浦浦を駆けめぐるようにになった。

手枷足枷

これを罪人の手首と足首にはめて自由に動けないようにした。そこから、自由を束縛するものや、束縛されている状態をいう。

▼「手枷」と「足枷」は昔の刑具。

【例】絶対に借金しないと高言したことが手枷足枷となつて、有望な新規事業に投資する金を確保できなかった。

適材適所

才能は人それぞれであり、向いている仕事と向いていない仕事がある。その人の才能を生かすために、最も才能を発揮できる仕

【類】羞月閉花（しゅうげつへいか）

沈思黙考

黙って考えこむこと。物事に深く思いを巡らせること。

【例】長い沈思黙考の後、父はようやく口を開いた。

【類】熟思凝想（じゆくしもうそう）、沈思凝想（ぎようそう）

珍珠佳肴

珍しい食べ物とよい酒肴。つまり、大変な御馳走のこと。

【例】あれほどの珍珠佳肴のもてなしを受けたのは初めてだ。

津津浦浦

全国各地、あらゆる場所。

▼「津」は船着場や港という意味で、海沿

事や地位につけること。

【例】新人にはいろんな仕事を経験させ、その才能を見極めたうえで適材適所の人事を行う。

【類】量才録用（りようさいろくよう）

鉄心石腸

鉄のような強い心臓と石のように固い胃腸という意から、意思や精神が堅固で、どんな障害にも動ぜず、誘惑にも負けないことをいう。また、そのような強い意思、精神。「石心鉄腸」ともいう。

【例】たとえ批判を浴びようとも、鉄心石腸をもつて自分の信念を貫く。

【類】堅忍不拔（けんんにんふばつ）、鉄意石心（てついせきしん）、鉄肝（てつかん）石腸、鉄石心腸（てつせきしんちよう）

徹頭徹尾

初めから終わりまで。また、一つの考え、方針などを最後まで貫き通すこと。前の言

葉を打ち消す意味でも使われる。

▼「徹」は一つのことを貫くという意味。

例 大恩ある先生に逆らうようなことは徹頭徹尾ありません。

類 終始一貫（しゅうしいっかん）、首尾（しゅび）一貫、初志貫徹（しよしかんてつ）、徹上徹下（てつじょうてつつか）

鰻鮓之急

目前に困難なことや危険が迫っていて急を要すること。焦眉の急。

▼「鰻鮓」は、鰻にできた水たまりであえていける鮓。

故 わだちの水たまりにいる鮓にとって、遠くから運んでくる水よりも、すぐにもらえる近くの水のほうがよいという。

例 親友の鰻鮓之急を救うために立ち上がる。

類 涸鰻鮓魚（こつふぎよ）、小水之魚（しやうすいのうお）、釜底遊魚（ふていのゆうぎよ）、風前之灯（ふうぜんのともしび）

手練手管

あの手この手を使って人を巧みに操ったり、だましたりする手段や方法。

▼「手練」は、巧みな言葉で人をまるめこむ方法。「手管」は、口先だけでうまいことを言い、人を自由に操ること。

例 セールスマンの手練手管にしてやられた。

天衣無縫

天人・天女の衣服には縫い目がないように、詩歌などに技巧のあとがなく、自然で完璧に美しい様子。また、振舞いがわざとらしくないこと。飾り気がなく、無邪気な性格・行動。

例 天衣無縫な彼は誰からも好かれている。

類 天真爛漫（てんしんらんまん）

天涯孤独

広い世界中に身寄りがない一人もいないこと。

平）とも書く。

例 就職がまだ決まっていけないというのに、焦る様子が全くない。なんとも天下泰平な人だ。

類 泰平無事（たいへいぶじ）、平穩（へいおん）無事

天空海闊

ささえるもののない大空、果てしなく広がる海のように、度量が大きく包容力に富んでいること。また、ほかからかて屈託がなく、さっぱりしていること。

例 俳優として落ち目になっていた時期、天空海闊な女房の笑顔がどれほどの支えになったことか。

類 天高（てんこう）海闊、豪放磊落（ごうほうらいらく）、自由闊達（じゆうくわつたつ）

電光石火

非常に短い時間や、行動が敏速に行われることのこと。たとえ。

天涯比隣

また、異郷にただ一人で暮らすこと。

▼「天涯」は空の果てにも比すべき遠い土地という意味。

例 たった一人の肉親だった兄が亡くなり、私は天涯孤独の身となった。

遠くにいても、まるですぐ近くにいるかのように親しく思うこと。また、そのような関係にある友達のこと。

▼「比隣」は、すぐ隣の家の意。

例 海外に赴任して彼女とは会えないが、メールのやりとりをしていると天涯比隣の思いがして寂しくないう。

天下泰平

世の中がおだやかに治まっていて平和であること。また、平穩でのんびりしている様子。

▼「泰平」は世の中が平和なこと、

天災地変

▼「電光」はいなびかり、「石火」は火打ち石で打った火のひらめきの意。

例 スローで再生して見ないと分からないほどの電光石火の早業。

疾風迅雷（しつぷうじんらい）、紫電一閃（しでんいつせん）

地震、台風、洪水、津波、落雷などの自然現象によって引き起こされる災い。

例 天災地変は、いつ自分の身に降りかかってくるかも知れない。

天変地異（てんぺんちい）、天変地変（ちへん）

天壤無窮

天と地のように終わりがなく、永遠に続くこと。

▼「壤」は大地の意。「無窮」は「窮（きわまり無し）」で、どこまでも果てしがないことをいう。

天神地祇

例 この世の天壤無窮を神仏に祈る。
天地悠久（てんちゆうきゆう）、天長地久（てんちようちきう）

すべての神々のこと。

▼「神」は天にある神、「祇」は地にある神を意味しており、仏教では、梵天・帝釈天や欲界に属する夜叉を「天神」、人間界にある堅牢地神や八大魔王などの鬼神を「地祇」としている。また、神道では、高天原の神や菅原道真をまつたものを「天神」、元々国土にいた大物主神や猿田彦神を「地祇」としている。

皇天后土（こうてんこうど）、天地神明（てんちしんめい）

天真爛漫

明るく無邪気で屈託がないさま。ありのままの真情が言動に表れること。

▼「天真」は、天から与えられた純粹の性質の表現。

例 天地神明に誓って嘘いつわりはない、天地神明にかけてやりとげる。

天神地祇（てんしんちぎ）

輾転反側

繰り返して寝返りを打つこと。いろいろと思いつき、なかなか寝つけないこと。

▼「輾転」は車輪が回ることで、転じてそのようにぐるぐるするところが、向きが変わるという意味。「展転」とも書く。「反側」は寝返りを打つという意味で、同じような意味の語を重ねて強調したもの。

例 急病で倒れた母のことが心配で、昨夜は輾転反側し、一睡もできなかった。

天然自然

人の手が加わっていない状態。あるがままの様子。

例 人工の森にもそれなりの美しさはある

天地神明

天と地のすべての神々のこと。

天地開闢

天地発生のとき。この世の始まり。混沌として一つだった天と地が分かれて二つになったという考えから、世界の始まりを意味する言葉になった。大げさな表現として使うことが多い。

▼「闢」は開くという意味。

天地開闢以来の大事業。
開天闢地（かいてんへきち）、天地創造（てんちぞうぞう）

が、やはり天然自然の森の眺めのほうが素晴らしい。

㊦ 自然天然（しぜんでんねん）、天地（てんち）自然

天罰観面

悪いことをした罰が、たちどころに天からくだされること。悪い行いには必ず報いがあるということ。

㊦ 「観面」は、あることの効果や報いがすぐに現れるという意味。

㊦ 自動車を盗んで事故にあうとは天罰観面だな。

㊦ 悪因悪果（あくいんあつか）、天網恢恢（てんもうかいがい）

田夫野人

教養や良識に欠ける人、礼儀をわきまえない粗野な人のこと。さげすみの言葉だが、謙遜の意味で使うこともある。

㊦ 「田夫」は農夫、田舎者の意。「野人」

めぐらした網。「恢恢」は、広くて大きいこと。天網は大きすぎて目が粗いようだが、物をすくい漏らすことはないから、悪いことをしてはいけないという戒め。

㊦ 天網恢恢疎にして漏らさず。

㊦ 天罰観面（てんばつてきめん）

天佑神助

天の助けと神の加護。転じて、思いもよらない偶然によって助かることをいう。「神助天佑」ともいう。

㊦ 「佑」は助けという意味。

㊦ できるかぎりの方策は講じたのだから、後は天佑神助を祈ろう。

当意即妙

その場に適応した、とつさの機転。また、そのように気がきいていること。

㊦ 「当意」は、その場で素早く考えること。

は田舎に住む人、身なりや礼儀、世間一般の慣行などを気にしない人の意。

㊦ 私は田夫野人です、失礼の段はお許しください。

㊦ 田夫野老（やろう）

天変地異

自然界に起こるさまざまな災害や、信じられないような大異変。

㊦ 「天変」は日食・月食・暴風など、天空に起こる異変。「地異」は、地震・火山噴火・洪水など、地上に起こる異変。

㊦ あなたが料理を作ってくれるなんて。天変地異が起これなければいいけど。

㊦ 天災地変（てんさいちへん）、天変地変（ちへん）

天網恢恢

どんなに些細な悪事であろうと、天は決して見逃さず罰をくだすという意味。

㊦ 「天網」は、天が悪事を見張るべく張り

「即妙」は即座の機転、機知。

㊦ 意表をつく質問に一瞬たりいだが、当意即妙の受け答えで乗り切った。

同工異曲

音楽や詩歌などで、つくる方法は同じであっても趣が異なること。見かけは違うように見えても、中身はたいして変わらないという意味で使うことが多い。「異曲同工」ともいう。

㊦ 新製品といっても従来のものと同工異曲ではないか。

㊦ 大同小異（だいどうしやうい）

同床異夢

一緒に仕事していて意見が一致しないこと。立場が同じでも、目的や考え方は異なっていること。同じ寝床に寝ているが、互いに違う夢を見ることからきている。

㊦ 長くコンビを組んでやってきたが、同床異夢であることが分かったからには、解散し

たほうがよさそうだな。

類 同床各夢（かくむ）

道聴塗説

受け売りの話。いい加減な聞きかじりの噂。

▼「塗」は「途」と同じで道の意。たまたま路上で聞いた話を、すぐに路上で他人に話すことからきている。

例 道聴塗説に惑わされず、自分の目と耳で確かめることが大切だ。

党同伐異

事の是非にかかわらず、仲間には味方して反対する者を攻撃すること。ひらたく言えば身びいき。

例 非はあなたの息子さんにある。それなのに私を責めるとは、党同伐異ではありませんか。

類 党同異伐（いはづ、標同（ひょうどう）伐異

うはくそつ、南船北馬（なんせんはくば）

稲麻竹葦

イネ、アサ、タケ、アシが生い茂っていることから、人や物がたくさん入り乱れている様子のたとえ。また、周囲を敵が幾重にも取り囲んでいることのたとえ。

例 二十年ぶりの優勝とあって、祝賀会の会場は稲麻竹葦の賑やかさだ。

党利党略

自分の属している集団の利益だけを守るために巡らすばかりごと。

例 どの政党も党利党略ばかりを優先させて、国民のことを考えていない。

螳螂之斧

弱い者が、自分の非力を顧みずに強い者に立ち向かうこと。また、無謀な勇気をふるうこと。身のほど知らず。

▼「螳螂」はカマキリ。カマキリが、どん

同病相憐

同じ病気にかかっている者は、その苦しみがよく分かるので互いに同情しようということ。また、同じ苦労をしている者同士が助け合うこと。

洞房花燭

結婚式の夜。新婚初夜。

▼「洞房」は奥まったところにある婦人の部屋。「花燭」は「華燭」とも書き、華やかなともしびのこと。「華燭之典」はここからきている。

東奔西走

東へ西へと奔走することから、あちこちに忙しく駆け回ることをいう。

例 新聞記者は特ダネを追って東奔西走している。

類 東行西走（とうこうせいそう）、東走西奔（とうそうせいほん）、南行北走（なんこ

な相手に対しても斧のような前足を振り立てて向かっていくことからきている。

例 螳螂之斧だということは承知しているが、腐りきった経営陣と戦わなくては会社はよくならない。

類 蚊子咬牛（ぶんしこうぎゅう）

時世時節

それぞれの時代の風潮。世の中のあるさま。巡り合わせ。

▼「時世」は時代、あるいはその時代の風潮の意。

例 素晴らしいアイデアだが、時世時節に合わないから、実行するのは何年か待ったほうがいい。

得意満面

物事がうまくいって、誇らしげな様子が顔じゅうに満ちていること。

例 難しい司法試験に一発で合格したのだから得意満面になるのも無理はない。

喜色（きしよく） 満面

書物を通じて昔の賢人に親しむこと。

▼「尚友」は古人を友とするという意。

例 妻は読書尚友するようになってから人間がまるくなったようだ。

読書百遍

書物は数多く読めばいいというものではなく、一冊を何度も繰り返して読むべきである。そのようにして読めば、自然に書物の真意が分かるようになるということ。

例 難しいといつて敬遠せず、読書百遍してみなさい。必ず理解できる。

独断専行

周囲の人たちに相談せずに、自分一人で勝手に決めて行動すること。

▼「独断」は自分だけの考えで決めること。また、その判断。「専行」は上司の命令を

例 独立独行（どつこう）、独立不羈（ふき）、特立（とくりつ） 独行

徒手空拳

手に何も持っていないこと。武器を持たないこと。また、事を始めるに当たって資金や地位などがなく、自分の力量だけが頼りであること。裸一貫と同じ意味。

例 祖父は徒手空拳でアメリカに渡り、大成功をおさめたぞうだ。

例 赤手（せきしゆ） 空拳

塗炭之苦

ひどい苦しみのこと。

▼「塗炭」は泥にまみれ、火に焼かれるという意味。

例 大飢饉に襲われて人民が塗炭之苦を味わう。

例 水火（すいか）之苦

訥言敏行

内柔外剛

本当は気が弱いのに、外見は強そうに見える

受けず自分だけの判断で行うこと。「先行」と書くのは誤り。

例 君が優秀なのは知っている。しかし、独断専行生たのではチームワークが乱れて、不協和音が生じる。今後は慎んでもらいたい。

特筆大書

とくに目立つように大きく書き記すこと。▼「特筆」は大々的に書き立てること、ほめて大げさに書くという意味合いが強い。

例 期間限定という文字を特筆大書して購買意欲をあおる。

独立独歩

ひとりだし、自分の信じる道を突き進むこと。他からの束縛を受けず、他人の力も当てにしないこと。また、他とは異なるはつきりした特色があること。

例 いままで子供を甘やかしては独立独歩の妨けになる。

口数は少なく、行動は素早くすべしという君子の心得を述べた言葉。

▼「訥言」は口べたという意味。「敏行」は行動が素早いこと。

例 彼はあまり喋らないので目立たないが、訥言敏行の人で、大変有能だ。

例 訥言実行（じつこう）、不言（ふげん）実行

屠竜之技

一見素晴らしい見えるが、使い道がなく、実際には何の役に立たない技術のこと。

▼「屠竜」は竜を殺すという意。実在しない竜を殺す技を磨いたところで無意味であることからきている。

例 屠竜余技（のよき）

ること。内心の弱々しさをかくし、強そう
な態度を見せること。

【例】うちの部長は頼もしい人だと思っていた
が、得意先がとなりこんできたら姿をかくし
てしまった。内柔外剛だったんだな。

内憂外患

国内に懸念される問題を抱え、国外からは
わずらわしい事態がもたらされて、内外に
憂慮すべきことが多いこと。また、会社や
個人における内外の心配事という。

▼「憂」「患」共に心配事や災いの意。

【例】妻からは離婚話を切りだされ、会社では
商品へのクレームが相次ぎ、内憂外患の年だ
った。

【類】内患外禍（ないかんがいこ）

難行苦行

非常につらく、苦しい修行。転じて、大変
な困難に見舞われて苦勞すること。

▼「行」は、悟りを開くための仏教の修行。

【類】旅行雑誌の編集部に移って、南船北馬を覚
悟していたが、これほど出張が多いとは。

【例】東行西走（とうこうせいそう）、東奔
（とうほん）西走、南去北来（なんきよほく
らい）、南行北走（なんこうほくそう）

南都北嶺

奈良の寺々と比叡山。狭義には、奈良の東
大寺・興福寺と比叡山の延暦寺を指す。京
都の北都に対し、奈良を南都、高野山の南
山に対し、比叡山を北嶺という。

南蛮駄舌

やかましいだけで意味が通じない言葉。

▼「駄舌」は、モズのさえずりの意。自分
たちには通じない外国人の会話を蛮人の言
葉として卑しめて言った語。

二者択一

に

に

難攻不落

【例】創業時は得意先がなかなか獲得できず難
行苦行した。それを思えば、この不況もど
ういうことはない。

城や砦の守りが非常に堅固なため、攻撃が
難しく、陥落させるのが容易でないこと。
転じて、相手がなかなか自分の思いどおり
にならないこと。

【例】彼女と早く結婚したいんだが、父親が難
攻不落で、どうしても承知してくれない。

【類】金城鉄壁（きんじょうてつぺき）、金城
湯池（とうち）、南山（なんざん）不落、要
害堅固（ようがいけんこ）

南船北馬

忙しく各地を旅して回ること。たえずあち
こちを旅していること。

【類】中国では、川や湖が多い南部へは船で行
き、山が多い北部へは馬で行ったという。

二つのうち、どちらか一つを選ばなければ
ならないこと。

▼「択」は選ぶという意味。

【例】甲乙つけがたいプランが提出され、二者
択一を迫られた。

【類】二者選一（せんいつ）

二束三文

数が多くても非常に安い値段しか付かない
こと。投げ売りの値段。

▼「二束」は「二足」とも書く。

【類】昔、金剛草履という大きくて丈夫な草履
があった。これが二足で三文という破格の安
値で売られていたことからきている。

【例】ブランド品を質屋に持ち込んだが、ちょ
っと傷があるということで二束三文しか納
めなかった。

日常坐臥

日々変わることのない生活。常々。いつも。
▼「坐臥」は座ることと寝ることの意。転

じて、いつもという意味。

【例】 日常坐臥、散歩していると季節の微妙な変化が感じられる。

【類】 行住坐臥（ぎょうじゅう）、常住（じょうじゅう）坐臥、常住不斷（ふだん）

日常茶飯

毎日の食事。転じて、日常的に起こるありふれた事柄。当たり前のこと。四字熟語としてよりも、「日常茶飯事」のほうが一般的。

【例】 彼女が時間を守らないのは日常茶飯のことなので、待たされてもイライラしなくなつた。

【類】 家常（かじょう）茶飯、尋常一様（じんじょういちよう）

日進月歩

日々に進み、月々に進む。つまり、絶え間なく進歩し、発展すること。また、急速な勢いで発展しつつあること。

【類】 だが、唐以後の創作ともいう。

【例】 亭主がお茶を飲みたいとき、何も言わないうに奥さんがお茶を持ってくる。あの夫婦は、まさに拈華微笑の仲だ。

【類】 以心伝心（いしんでんしん）

年功序列

技能や業績よりも年齢や年次にしたがって地位や待遇を決めること。職場での昇進制度をいうことが多い。

▼「年功」は長年勤めた功労、長年の熟練。

【序列】は順序。

【例】 日本は年功序列が当たり前だったが、最近は実力主義に変わりつつある。

【類】 長幼之序（ちようじゅうのじょ）、年功加俸（かほう）

年年歳歳

来る年も来る年も。年ごとに。また、毎年、同じようなことが繰り返される様子。「歳年々」ともいう。

二律背反

同一の前提から導き出された二つの判断が矛盾して両立しないこと。

【例】 この工事が周囲の環境にどんな影響を与えるのか、学者に調査してもらったところ、二律背反する報告書が提出された。

【例】 科学技術は日進月歩なので、今は最新のものでもすぐに古くなってしまう。

【類】 日就月将（にっしゅうげつしょう）、日新月异（にっしんげついつ）

拈華微笑

口には出さず、お互いが理解しあうこと。心から心へと伝わる微妙な境地、感覚。

▼「拈華」は、指先で花をひねること。

【類】 釈迦が弟子たちに説法した際、蓮華の花をひねって見せた。その意味を悟った弟子が一人だけいて、ほへんだ。このことからさ

【例】 年年歳歳のこととはいいながら、初詣の人数の多さには驚く。

年百年中

年がら年中。毎日毎日。一年中絶えず。好ましくない状態が続いているときに使うことが多い。

【例】 無理をして家を買ったので、年百年中、家計のやりくりに追われている。

【類】 年頭月尾（ねんとうげつび）

囊中之錐

才能がある人は、どれだけ多くの人の中にも、必ずその才能を発揮する。才能があれば、おのずと外に表れるものだということ。

▼「囊中」は袋の中の意で、袋の中に錐を入れると、その鋭い先端がすぐに突き出てくることからきている。

【例】入社したときから囊中之錐と評価されていただけあって、彼はすぐに頭角を現し、めざましい活躍をしている。

【類】鶏群一鶴（けいぐんいつかく）

は

敗軍之将

戦に負けた将軍のこと。これが転じて、物事に失敗して弁明する資格のない人を用う。敗戦の責任は兵士にはなく、指揮をとった将軍にある。したがって、敗れた将軍に兵法について語る資格はないということからきている。

【例】敗軍之将は兵を語らず。

背水の陣

追いつめられて、退くに退けない状態。また、あえてそのような状況に身を置いて、決死の覚悟で臨むこと。川、湖、沼など水辺を背にして陣を張ると退却路がない。し

て混乱した酒宴の状態。また、酒宴が終わった後、杯や皿が散乱しているさま。

▼「杯盤」は酒杯や皿などの食器類。「狼藉」は、狼が草を藉（し）いて寝た跡が乱雑なことから、乱暴をするという意。「狼藉」と書くのは誤り。

【例】今年の忘年会も杯盤狼藉のありさまになるんだろうな。

【類】落花狼藉（らつかろうぜき）

破顔一笑

顔をほころばせて、にっこりと笑う様子。また、心配事がなくなったり、緊張がとけたときに笑みを浮かべること。

▼「破顔」は表情をくずすこと。「一笑」は軽く笑うこと。

【例】第一志望の大学に合格して破顔一笑した。

博引旁証

たくさんさんの例を引用して、自説の正当性を

は

たがって、最悪の場合の陣立てのこと。

【類】漢の韓信（かんしん）は川を背にして陣を張り、「退けば水、進めば敵。同じ死ぬなら敵中に」と兵士たちを奮い立たせて戦い、大勝利をおさめたという。

【例】うちのような小さい会社がこれだけの事業費を投入するのだから背水の陣の心境だ。

【類】背水一戦（いつせん）、破釜沈船（はふちんせん）

杯中蛇影

疑いの心を持っていると、ありもしないことにもおびえてしまうということ。

【類】杯（さかすき）に映った月の影を蛇だと思ひ込んだという。

【例】仕返しを恐れているようだが、それは杯中蛇影だよ。

【類】疑心暗鬼（ぎしんあんき）、杯弓（はいきゅう）蛇影

杯盤狼藉

証明しながら論じること。

▼「博引」は多くの例を引用すること。「旁」は、広くあまねくという意味。「傍証」と書くと同接の証拠の意味になるので要注意。

【例】この論文は博引旁証しているので説得力がある。

【類】考証該博（こうしうがいぱく）、博引旁援（ぱういんぱうえん）

博学多才

広く、さまざまな分野にわたる知識に加えて、才能も豊かなこと。

▼「博学」は、もともとは孔子をほめたたえた語で、学問的知識の範囲が広く、人が知らないようなことにも詳しいこと。「多才」は、多くの領域にわたる才能を備えていること。

【例】テレビのクイズ番組で優勝しただけあって、彼女の博学多才には舌を巻く。

【類】博学多識（たしき）、博聞強識（はくぶんきやうしき）

は

んきようしき)、博覧強記(はんらんきようしき)

薄志弱行

意志が弱く、決断力や実行力に乏しいこと。

例 彼女とはいいい仲だったのに、ぐずぐずしているうちに彼女は友人と婚約してしまった。自分の薄志弱行が情けなくなる。

類 意志薄弱(いしはくじやく)、優柔不断(ゆうじゆうふだん)

白砂青松

白い砂浜と青々とした松林が続く美しい景色。日本に数多い海辺の景勝地を形容する語。

▼「白砂」は「はくさ」とも読む。

拍手喝采

手をたたき、声を上げて盛んにほめたえすること。

▼「喝采」は、もとは「やっ」という掛け

者を見つけたして育てるのが上手な人を「名伯楽」というのも、この人物からきている。

例 大プロデューサーの伯楽一顧が、彼女を人気女優にした。

博覧強記

いろんな分野の書物を広く読み、その内容をよく記憶していて知識が豊かなこと。

▼「博覧」は、読書経験がずば抜けていて、たくさんの知識を持っていること。「強記」は、記憶力がいいこと。

例 私が博覧強記なのは、行き帰りの電車で毎日、本を読みつづけていたからでしょう。

類 博学多才(はくがくたさい)、博識(はくしき) 多才、博聞(はくぶん) 強記、博覧強識(きようしき)

薄利多売

一つ当たりの儲けを少なくして単価を下げ、多量に売ることで大きな利益を確保しようとする販売方法をいう。いわゆるディ

は

声を出して采配を振るうという意味で、転じて「いいぞ、いいぞ」と大きな声でほめることをいう。

例 幕が下りると、満場の観衆が拍手喝采を送った。

幕天席地

意気込みが盛んで、志が大きいこと。また、小さなことにこだわらないこと。

▼「幕天」は天を屋根代わりにすること。「席地」は大地を席(むしろ、ござの意)にすること。

例 幕天席地の心意気で海外に雄飛する。

伯楽一顧

有力者に認められて評価が高まること。また、出世すること。

▼「伯楽」は馬のよしあしを見分ける名人の名。

例 伯楽が一頭の馬を振り返って見ただけで、その馬の値段が高騰した。素質のある若

スカウント商法。

▼「薄利」は利益が少ないこと。

破邪顕正

邪道や悪逆を打ち破り、正しい仏の道をあらわすという仏教語。これが転じて、一般には不正を打破し、社会に正義を広めることをいう。

▼「顕正」は「けんせい」とも読む。

例 破邪顕正の意気込みで検事への道をめざしている。

類 勧善懲悪(かんぜんちようあく)

破竹之勢

押さえきれないほどの激しい勢い。猛烈な勢いで突き進むこと。竹は最初の一節が割れば、あとは押すだけで簡単に裂けていくことからきている。

例 平幕の力士が初日に横綱を取る金星を挙げて自信をつけ、破竹之勢で勝ち進み、優勝した。

は